

大正四年

(二月)

本年ハ諒闇にて、すへての義式は廢されて新年状をも出さず。静閑なる元旦ニ付、俄に思ひ付て、予、李子と旅行する。泰、寿子ハ昨暮より江の島辺旅行中。

*義式(儀式)

一月一日 壬辰 金曜 晴。

朝五時起。仕舞済て、四方拝、祖先拝して、如例年、学校作法室にて、予はしめ越年生徒一同、椒酒雑煮を祝ふ。畢而例の新年帖揮毫始をなす。予、李子と小田原え旅行す。東京駅始めてにて、弘、靖子、早苗、静子、寿さま、辰子、雨宮送り来る。十一時十分發汽車に乗る。満員立往生の人多く、国府津迄。こゝの宿にて昼飯済せて、電車買切ゆるくと小田原本車迄。夫より車にて亀やに着。宿のもの久々にて大ぬに悦ひ、此宿も以前と違ひ湯殿も奇麗にて心地よし。端書にて無事着のよし留守宅え申遣す。不計、三宅雪嶺君挙家来られて、大ぬに面白く、夜十時臥。月光。

*小田原本車(小田原本陣)

一月二日 癸巳 土曜 晴。

朝七時頃、日の出よし。諸準備して九時十分輕便車来りて門前より此車ニ乗ス。実に満員、是又立往生と云。三宅花園子、御師匠さまだけでも腰を懸か(衍)けさせてと御たのみにて、外の人をのけて漸は入る。守屋氏、外に同行之人も居られて、此汽車中之賑はしき、笑い興して知らすゝの内に熱海ニ着。相摸やより人迎ひに来られて迎ひ新宅に案内せられ、奇麗にて心地よし。昼飯後、散歩して相摸や若嫁の案内にて、海岸つたひ隧道ぬけて、錦浦辺眺望の絶佳を繰りつゝ、天然の美を賞し、夕景相摸やに帰。此五ヶ年前とハ大發展いちじるし。夜、月光し。

*繰り(探り)

一月三日 甲午 日曜 晴。

予、李子と鳥尾氏を訪て午下より梅園に行。鳥尾子挙家と共に、梅花咲出て真盛といふ。遊園の人々群集可驚。撫松庵にて休憩之筈、あき間なく、漸曾我子の中えは入て休みたり。逍遙して風色を賛し、夕景、鳥尾氏に帰り、夕餐を饗せられ、八時頃相摸やに帰。

一月四日 乙未 月曜 晴。

朝より、予、李子と鳥尾子へ行。伊豆山行約の誘ひて一行十人連て徒歩して、途中露の臺、あざみ、水仙、野菊等つみつゝ行。伊豆山の相摸や四、五年前に設立したる千人湯をみる。是ハ珍らし、湯の池にて、人々湯鍊およき遊ぶ。こゝも大困(混)雑にて、漸二時中食して帰る。点
點比也。

*点點(点灯)

一月五日 丙申 火曜 晴。

此朝、旅館主人より横額枰張絹本持参して、是非願度とて、春七種を写す。家の画帖にも伊豆山途中の風景をかきて遣はず。此日、朝より鳥尾子の招にて西山の別荘二行。大せい也。此山五丁部とか。茶室もあり、庭園もよく出来て、昼の御弁当を仕ひて、昨年檜杉五千本植たると、見分のつもりにて山歩きする。滝あり、溪流あり。独木橋などいくつも渡りてゆく。行尽たる処、三島街道に出る。此時、宮様の御通行と云のて、立待て居ると、伏見若宮、華頂宮様にて、途中珍らしく御咄申上る。此時、一婦人来りて、伏見宮家の侍女にて、今宮様御逢に成て花蹊御用邸迄来る様との御命にて、外の者と別れて侍女と共に御用邸に参る。若様、姫宮も成らせられて大御満足さまにて、御二階の眺望殊結構、夕景迄にてまかりぬ。種々面白き御咄しも有たりか。

*五丁部(五町歩)

一月六日 丁酉 水曜 晴。

昨夜より出発の準備して、朝八時五十分の軽便にて帰。鳥尾子、御見立下される。外も大せいにて賑々し。小田原電車に乗。皆、国府津より汽車に乗。こゝにて昼食する。三時三十分着車。迎ひの人来らず。東京駅より車にて帰宅す。宅の者皆々驚く。電報不来、三時三十分後電報着。全く相摸や主人わすれたり。外に衣類の大袋不着。是も国府津停車場に残しありたり。先々安

着にて、皆々無事を悦ひ居り候。

一月七日 戊戌 木曜 雨、雪。

朝起。雨しけく、其内雪と成て、夜ニ入て益甚しく、積る三寸余。

一月八日 己亥 金曜 曇。

始業式。職員生徒皆集。九時、式場にて校長勅語拝読、次、大東氏之生徒今後之心得を演せられ、十時退散。

一月九日 庚子 土曜

朝の課業はしむ。

一月十日 辛丑 日曜 晴。

朝より伏見宮へ参殿。今般元帥に任せられたるに付、恐悦申上る。閑院宮へ寒中御機嫌伺に参る。御息所、恭宮様に拝謁申上る。御昼戴てまかる。

一月十一日 壬寅 月曜 雨。

昨夜よりの大雨。課業例の如し。弘、夜行にて京都に行。京威、房州より着。

*京威(重威)

一月十二日 癸卯 火曜 晴。

図書室稽古始をなす。来る者四人也。午下、恭宮、茂木恒子。畢而かねて約の如く三時より棚橋氏を訪ふ。總子、元の御弟子たち十人計打寄られて謡初、皆々新期之稽古にて大々はつみ、中にも箕作夫人よく謡はれたり。東北、桜川、草子洗、雲雀山、次に總子三味線、外ニ琴にて松竹梅を奏したり。妙々。九時帰。重威、六時何分の汽車にて京都行。陛下葉山行幸。

*總子(絢子) *新期(新規) *總子(絢子)

一月十三日 甲辰 水曜 晴。

朝、課業例の如し。来客、長尾収一、堀越しな、関屋英に。正子、午下早々、方々寒中見舞

に行。

* 関屋英に (関屋英子)

一月十四日 乙巳 木曜 晴。

朝、課業例の如し。終日揮毫ものす。来客、尾竹竹披妻、今度議員撰挙之義願来る。夕景、寄宿舎にて万里伯と夕餐を共にして、八時頃迄夜はなしする。正子、代々木へ行、一泊する。

* 尾竹竹披 (尾竹竹披)

一月十五日 丙午 金曜 晴。三十五度。

朝、水道氷付て、熱湯をそゝきかけても昼頃迄水出す。すへて氷付く。近来稀なる嚴寒と云ふ。本日校外生始業。堀田、松平、角田、河村氏也。来客、清水初子。発信 土井氏え。大宮氏え。手塚定太郎え返書。海事協会二も。

* 水出す (水出す)

一月十六日 丁未 土曜 晴。

朝の課業例の如し。来客、森律子、清水富子。本日朝、重威京師より帰る。正子、代々木より帰宅。

一月十七日 戊申 日曜 晴。36 (度)。 青松寺薫風会。

朝、堀田伯を訪ふ。此度、男児御出産ニ付、御悦申上、御祝ものす。御子様ハ実りに々しき、未たのもしき様、御健全ニ御見うけ申上たり。帰宅、昼飯後、青松寺薫風会ニ行。二座聴聞して、万里伯を訪ふつもり、留守ニ付、それより姉小路公政伯を訪ひ、良子様を伺ひ、寿子、早苗先在て種々御咄中、見暮て帰。朝五時、重たけ房州ニ帰る。

* 見暮て (日暮て) * 重たけ (重威)

一月十八日 己酉 月曜 晴。39 (度)。

朝の課業如例。泰、小田原より帰宅。又直ニ小田原へ行。来客、福島進、大日本神祇史持参。来ル廿三日、新年会、職員一同晚餐会催ニ付、招待状出す。小包物出ス、美の遠藤、願泉寺、

唯泉寺、御寺御所、美尾の、若間、芸州波多野、寺田善左衛門、田中三五郎。

受信 房州いく子より。

発信 愛国婦人会欠席とゞけ。

*美の（美濃） *美尾の（美尾野）

一月十九日 庚戌 火曜 晴。

朝、図書室の稽古する。午下、恭宮、茂木恒子。来客、岩倉男の家来ふし女二逢ふ、長尾かす子。正子、寿子、石山基たけ氏へ行。此夜八時、学校え賊は入たる由申聞、驚々入、見る処、裁縫場ガラス窓破り、五年生之裁縫物入れ有る処、ガラス破りて取散らし、風呂敷のみにしたり。早速巡查も来りたれと、夜中の事として分明ならず、其まゝにして明日の事と云。

受信 美をのより、はかき。

*石山基たけ氏（石山基威氏） *美をの（美尾野） *はかき（端書）

一月二十日 辛亥 水曜 晴。 箕浦静子、采女町精養軒。

朝より五年生も来りてしらへたるに、十五人分ぬすまれたり。実に試験の品にて高費の物にて申分なく、不取敢生徒親元えわび手紙を出す。警（以下、記述ナシ）。予、李子、五時より采女町精養軒へ行。箕浦静子、野々村氏との結婚披露会にて、余興、落晤、及貞水の講談等。済て食堂ひらけ、食事済て九時退散。

受信 鴨二羽着、尚子より。

*結婚披露会（結婚披露会） *落晤（落語）

一月二十一日 壬子 木曜 晴。 海事協会、午下一時より。

課業例の如し。午下一時より海事協会ニ参集す。会長毛利安子、鍋島栄子様御出にて、余興、貞山の講演三席ありて食事。六時全畢而帰。

受信 房州より落花生着。

一月二十二日 癸丑 金曜 陰。

朝、校外生、角田、河村、橋本之三人也。来客、星の花子。

*星の花子（星野花子）

一月二十三日 甲寅 土曜 陰。

課業例の如し。本日ハ当校職員一同を招待して日比の慰労会のつもりにて、場所ハせまくて寄宿舎八号、九号を場にあてる。午下四時より続々来客にて、欠席も有之て、惣廿七人也。別而余興もなけれど、李子より福引ありて興をましたり。九時、歓を尽して帰られたり。此時、少雨ふり出したり。

一月二十四日 乙卯 日曜 陰。

昨夜より雨、雪少し降る。終日揮毫ものす。

一月二十五日 丙辰 月曜 晴。

甲五年、絹本にかゝる。午下、牛天神え参詣する。夕、寄宿舎新年会に招かれる。

一月二十六日 丁巳 火曜 陰。

朝、図書室稽古。済て、午下恭宮成らせられる。

発信 房州万里、大坂美をの。

*美をの(尾野)

一月二十七日 戊午 水曜 晴。

課業例の如し。来客、間々田初子。天晴、長閑にて、春三月の如し。十二時、河田氏え行。白山え参詣して帰。正子、好天気にて長尾氏、津田二行。夜も月よく、奇麗なる夜なり。

一月二十八日 己未 木曜 雨。54(度)。

朝より雨。午下、俄に空かき曇り竜の天上の様に成りて、又はれ、又真くらになりて、後天拭か如く晴たり。来客、横浜石川細君、安田暉子、弘道会田中氏。課業例の如し。
発信 坪井正、宮崎照え。

一月二十九日 庚申 金曜 晴。

校外生、朝の稽古して午下之分ハ休む。一時半より愛国婦人会本部え集る。堀内中将凱旋せられて、青滔戦争実況演舌委しく承りて、日本の強きには感心したり。其外の事ハ未だ文一(分)一明に至らぬ様也。五時済て帰。帰途角田氏え訪ふ。栄子しきりに留られて、夕餐を共にしてゆるく帰宅す。

*青滔戦争(青島戦争)

一月三十日 辛酉 土曜 晴。

朝九時より十二時迄、甲五年試験を見る。午下一時半より三条公実様一周忌三付、参拝して洋食饗せられて四時帰。帰途、高倉寿子様を伺ひ、暫く種々御咄し申上、御合のもの戴て帰。受信 芸州度会より菓子着。

*三条公実様(三条公美様)

一月三十一日 壬戌 日曜 小雨。45(度)。

朝より小雨降り出したり。来客、京都御寺御所祖琉尼、久々にて来り種々咄して帰られたり。津田弘視、子供三人同道にて来り、夕景帰る。此時、泰、小田原より帰宅。

(二月)

二月一日 癸亥 月曜 雨。

課業例の如し。少雨降出したり。泰、小田原え行。

二月二日 甲子 火曜 陰、雨。

図書室教授畢る。午下、恭宮、恒子、御稽古申上る。午下三時頃より新田氏を問ふ。夕景より雨ふり出し、夕飯馳走に成りて七時比帰。書を出す、古屋朝子え。発信 軽井沢市村え。

二月三日 乙丑 水曜 陰。

課業例の如し。午早々、河田氏え行。石山基陽氏を訪て帰。正子微恙二付、長尾氏診★(言十察)する。

*診★(言十察) (診察)

二月四日 丙寅 木曜 節分。雨。

甲五年試験画を見る、朝九時より十二時迄。寄宿舎豆まき式、畢而福引あり。正子臥蓐。発信 佐の秀子、早川京子、津田栄子え出ス。

*佐の秀子(佐野秀子)

二月五日 丁卯 金曜 陰。

校外生教授畢る。午下も教授す。

二月六日 戊辰 土曜 陰。34(度)。

朝九時より十二時迄、試験をみる。

二月七日 己巳 日曜 晴。

朝より午下四時迄、試験を見る。来客、村越匡氏、婦人世界記者坂水とわ、大炊晨子夫人一泊、井出百合子。正子、市川え行。

二月八日 庚午 月曜 晴。

課業例の如し。

受信 野々村静子、跡見いく子。

二月九日 辛未 火曜 晴。

課業例の如し。来客、石井初子、佐藤少将夫人ソフイ。図書室稽古畢る。午下、恭宮成らせられる。午下二時頃より雨ふり出したり。

二月十日 壬申 水曜 晴。

課業例の如し。午下より、予、正子と同行にて代々木大炊氏を問ふ。師前君、石山吉子等迎えられて、夕餐を呼れて帰。

二月十一日 癸酉 木曜 雪、雨。

朝より雪ふり出して、又雨になる。来客、代々木久米氏より、外妻と子供来る。

二月十二日 甲戌 金曜 雨。

朝の校外生稽古済て、午下のも相済。朝、閑院宮松井氏より電話にて、大島陸軍次官嬢入学依頼になるけれ共、先月より満員にて許可如何と申たれハ、又直ニ松井氏来られて款願に及はれ、又大島氏夫人来られて御頼みに相成候。右ニ付試験致す事にて相済。

*款願（嘆願）

二月十三日 乙亥 土曜 晴。

朝より五年甲乙、色紙之試験はしむ。来客、岡田金。

二月十四日 丙子 日曜 晴。

朝より揮毫。午下早々、黒田侯を訪ふ。茂宮様ニ拝謁す。頗る御機嫌よく成らせられ御申分さまもあらせられず、暫時御咄申上て帰。午下四時より、余、李子と同行、森律子より招待にて帝劇見物す。十一時帰。天晴朗、春三月の如し。

二月十五日 丁丑 月曜 晴。

朝の課業例の如し。午下早々、墓参して帰。

二月十六日 戊寅 火曜 晴。

図書室の稽古済て、午下、恭宮成らせられる。茂木恒子も。午下四時、房州重威来る、陸にて一泊。神戸佐の氏より、まなかつほ味噌漬一樽着。受信 軽井沢市村より、は書着。

*佐の氏（佐野氏） *かつほ（鯛） *は書（端書）

二月十七日 己卯 水曜 晴。

朝の課業畢る。午下早々、河田氏え行て帰る。重たけ、夜汽車にて京都え行。万里小路伯より博房様三十年祭典二付招待状来る。

*重たけ (重威)

二月十八日 庚辰 木曜 晴。

課業例の如し。五年生、書の試験はしまる。午下一時より、約の如く姉小路典侍御入にて、二階座敷にて、久々種々の御物語にて時の移るをしらすといふ。御合のものさし上て、四時過御帰あらせられる。御供豊女。

二月十九日 辛巳 金曜 雨、雪。

校外稽古日。朝の分済て、午下一人来る。雪と雨にて厳寒なり。夕景より晴たり。

二月二十日 壬午 土曜 晴。

朝の課業畢る。正子、代々木二行、一泊。

二月二十一日 癸未 日曜 晴。

朝より浅草観世音え参詣して、本願寺に独乙俘虜運動をみる。みな恥かしき様子もなく大せいの見物の中を面白く運動して居る。また、午下早々青山三条公暉男え行。此度皇子傳育官に任せられたるに付、御悦申上る。夫より芝万里小路え故博房様三十年祭二付参詣、玉串さゝける。一族の大勢にて種々の御談話中に晚餐となりて、夜八時帰。重たけ、京都より帰る。

来客、下瀬勝千代。

*重たけ (重威)

二月二十二日 甲申 月曜 晴。

朝の課業畢る。午下墓参して、五軒町姉典侍様を伺ひて、四時頃迄遊ぶ。已ニ帰ル。此時、前生徒なる齋藤きよなる者来りて、来客も有て逢ふ事出来すとて断るたるに帰らす。大ぬにもてあましたるに漸帰りぬ。夜に入てきよの宅より人来りて、此者発狂致し居り候よして、漸わけ分りたり。

津田栄子、十一時三分前男子出産。

*断るたる(断りたる)

二月二十三日 乙酉 火曜 晴。夕景より雨。

図書室稽古日にて、本日より画の試験ニかゝる。午下、恭子殿下成らせられる。茂木恒子も。

来客、土井早苗、田鶴子、玉枝、大久保。

発信 下瀬勝千代え。吉田米三郎え。

二月二十四日 丙戌 水曜 晴。

課業例の如し。午下早々、河田氏え行。それより愛国婦人会第十四回総会準備相談会ニ会す。

六月二日、三日之予定。来客、中村幸子、長谷川智賀子。不在にて不逢。

二月二十五日 丁亥 木曜 晴、風。

課業例の如し。午下早々、予、正子と白木や、三越え雛人形を見ニ行て帰。

発信 弘より書至。

二月二十六日 戊子 金曜 雪。和慰会。

朝の校外生稽古する。午下の分休む。予、十二時より歌舞妓座ニ行。実禄仙台萩三幕、お染久松、桜みたれ、所作操三番、関寺小町、三人連石橋、斎入一世一代と云。幹事、酒井、葉室夫婦。客、裏松道子の送別之催、千代子、万伯、予と也。堀田三人、李子、智子、加茂とみ子、万里栄と十五人也。十時過帰。雪ふり出してたちまち積事三寸計。横浜田辺幸七会葬、木村氏代理。

受信 秋田庄司氏より菓子着。

発信 大宮智栄え。

*歌舞妓座(歌舞伎座) *実禄仙台(実録先代萩)

二月二十七日 己丑 土曜 雨。

課業例の如し。来客、多久毎、橋本母。

発信 石井初子え。

二月二十八日 庚寅 日曜 雨、風。

朝より揮毫ものす。来客、夜、棚はしあや子。

*棚はしあや子（棚橋あや子）

（三月）

三月一日 辛卯 月曜 38（度）。

寒気堪かねたり。課業例の如し。正子、津田へ行。

三月二日 壬辰 火曜 晴。

寄宿舎にて朝の授業済で、午下、恭宮成らせられる。午下四時頃より雛祭にて、来客、新田菊子、子供三人連にて、外ハ寄宿の子供にて賑々敷、夜八時皆帰。来客、内田木綿、下瀬勝千代。

三月三日 癸巳 水曜 晴。

課業例の如し。十二時より河田氏へ行。帰途、姉小路え寄。御出勤中にて暫くして帰。来客、大炊駒女。

発信 横浜長与え書をよす。

三月四日 甲午 木曜 晴。

課業例の如し。書生岡本之義二付、正子、寿子、代々木大炊氏へ行。夕景帰。来客、増田浪江。

三月五日 乙未 金曜 雨。

校外稽古日。午前、午下とも例の如し。五時過より、予、泰、正子、寿子と共に石山基春子初誕生日ニ付晚餐に呼れて、大雨、風、雷も交而、八時頃帰る。此時、又大風雨也。玄関書生岡

本、暇を出す。

三月六日 丙申 土曜 晴。 有約、原村伴田六之介方行。

朝の課業十二時畢る。○(時)三十分より、予、李子と同道、東京駅迄、宮原氏、伴田氏細君
出迎れ、一時三十分汽車にて同行す。蒲田より車にて原村迄十五丁と云。伴田氏別荘二行。主
人六之介氏出迎れる。庭園之広き、紅白梅花、今日を見頃の咲出、みな古木、株も見事、二か
ゝえも有。池を廻らして座敷も二間、及茶席等、梅花書屋と云。此処にて合のもの出て玉照園
の帖に画をかく。五時頃迄、ゆるく遊ひて、又汽車にて帰。西村氏に逢て同行、夕餐を。

三月七日 丁酉 日曜 晴、夜大雨。

朝九時より、予、李子、寿子と同じく久々にて観世別会能をみる。面白くみな芸を上げたり。
感心々々。

一 咸陽宮 元滋

二 俊 寛 山階

三 葵 上 元滋

四 遊行柳 片山

五 正 尊 橋岡

三月八日 戊戌 月曜 晴。 60(度)。

朝、課業例の如し。李子、横浜石川氏へ行、着帯之祝二付。来客、夕景、幸島菊子。同(来客
)、小野里きみ子。

神戸早川氏え、佐渡後藤権左衛門え。郵送、宮原六之助氏え、大分佐野秀子え、北海道篠原馬
吉え箱書附。小樽吉田米三郎え。

三月九日 己亥 火曜 晴。

研究生授業済て、午下、恭宮様成らせられる。茂木恒子も。尾の道橋本つや子より蒲鉾と手紙
と着。

三月十日 庚子 水曜 晴。

課業例の如し。

宮原六之助君より御礼の手紙着。秋田庄司兵蔵より、かた栗着。書をよす、橋本艶子え、庄司氏え、下瀬氏え。

*かた栗(片栗)

三月十一日 辛丑 木曜 晴。

課業例の如し。午下、秋元八重子様御出にて御揮毫もの遊はして、午後五時頃御帰り相成たり。広島県立福山高等女学校加々美はな之書至。

三月十二日 壬寅 金曜 晴。

朝より校外生教授して、午下も同じく教授す。

三月十三日 癸卯 土曜 雨、雪。

泉会執行。朝の教授済で、午下一時より泉会。朝より雪まじりの雨にて段々つよく相成て、會員珍ら敷来集す、二時。増田義一君欧州漫遊談、平和戦争之好時氣に際して殊更面白く、一同大悦。三時過済。一同、茶室、花の教場にをし合へし合にて茶菓。雪益盛にふりて、五寸五部と云。五時頃一同解散す。道すからさそ困難事と察し入候。受信 間々田初子より小包物来る。

*五寸五部(五寸五分)

三月十四日 甲辰 日曜 晴。 朝九時迄に門野氏え行事。

此日、門野玉子、態々来られて用向の事頼入る。来客 大坂毎日 東京日々 記者神近市子、画を依頼する。

午下早々、番町島田氏を問ふ。信子さまに對面する。御二男先々よろしき方に迎はれたり。大に安心々々。引歸し帰宅す。此朝、泰、青梅え行。

三月十五日 乙巳 月曜 晴。

朝、墓参して歸。課業例の如し。書をよす、間々田初子え、大宮花真師え、みをの順え。

*みをの順(美尾野順)

三月十六日 丙午 火曜 晴。

午前、午後の授業畢。恭宮成らせられる。茂木恒子も。本日にて御稽古御休み。午下三時より

正子、寿子と、本郷え行。十一時帰。

受信 葉山みをの順より甘鯛着。

*葉山みをの順(美尾野順)

三月十七日 丁未 水曜 晴。

課業、試験、本日にて畢。午下早々、河田氏え行。夫より高田馬場津田を問ふ。栄子も昨日より床払して、無事出産の小児をみる。実に発育もよく、よき男児也。名を弘行と云。暫時にして、正子、李子来る。四時頃、予ハ車にて帰。此日、泰、青梅より帰宅す。弘道会田中久来る。

三月十八日 戊申 木曜 晴。

校外生稽古日にて、堀田和子、書の御入門。来客、森堯子。午下之稽古済。本日にて仕舞。予、墓参して帰。金曜日之記事也。

三宅竜子より使来、菓子到来。

三月十九日 己酉 金曜 彼岸の入。晴。

終日、五年生来りて合作物落款す。泰、青梅より帰宅。

三月二十日 庚戌 土曜 晴。

課業例の如し。

三月二十一日 辛亥 日曜 晴。

朝より揮毫ものす。午早々、青松寺薫風会に参りて、それより万里伯邸にて和慰会。幹事、酒井忠克、葉室伯。此会者、裏松道子上海え出發二付、和慰会より送別紀念品を送る事也。会する者廿人余。面白く、夜八時退散す。

三月二十二日 壬子 月曜 春季皇靈祭。晴。

朝より墓参して帰。祖先祭を執行す。来客、姉小路公正伯、井出百合子。夜二入て雨ふり出したり。朝早く、泰、青梅へ行。

*姉小路公正伯（姉小路公政伯）

三月二十三日 癸丑 火曜 雨。

朝より研究生の画をみる。午下四時半迄。朝より雨。午下晴たり。

発信 茂木栄子。大宮師え。佐野え。

三月二十四日 甲寅 水曜 晴。

朝より生徒製作物をみる。午下早々、河田氏え行て帰。

三月二十五日 乙卯 木曜 彼岸の決（結）願。晴。

三月二十六日 丙辰 金曜 晴。

朝より書画之陳列。本年ハ卒業制作多く見事、裁縫も中々見事に出来たり。

三月二十七日 丁巳 土曜 晴。

早朝よりも準備。式場も立派に飾付等も出来。午下第一時より卒業証書授与式。生徒全部朝より来校。一時之振鈴にて着席。始校歌。証書授与百七名也。優等証、勉学章、五ヶ年間勉学章、笹川菊子別褒章を授く。校長訓辞、卒業生惣代答辞、在校生総代祝辞。此時一同此別を惜みて涙なからに謝辞を伸ふ。来賓一同感にうたれて涙を流す。慶応鎌田氏演舌。増田義一氏之演舌も結構ニテ、式全畢。式畢テ茶菓を出す。余、卒業生え御すもしを出す、全部に菓子を出す。本日之式実嚴重ニテ、来賓も感し入たりと云。

三月二十八日 戊午 日曜 晴。

五年卒業生謝恩会。本校ニ於て執行す。十一時頃より習字教場を食堂にして午餐を饗されたり。職員一同食事中、ヒ（ヒ）アノ曲、及独誦等ありて、二時畢。階上に余興場を設け、卒業生の謡、及琴曲、三味線、踊等にて十番もあり。本年ハ未た諒闇中ニ付質素にて余の芸等ハなく、

四時過めて（日出）度済。来客、田井玉子と其母と、宮前千代子、伯母と。弘、午前京師より帰宅す。

三月二十九日 己未 月曜 晴。

来客、井上峰子、伯母と、前田茂子、川田豊吉氏細君。晴雨不定日。津田弘視氏、上海出張ニ付東京駅迄見立る。予、正子、李子、弘、靖子、早苗と也。三井之人々大勢にて殊に賑々敷、先無事出發す。

三月三十日 庚申 火曜 晴。十五夜月清し。

朝より絹粹張トウサ（礬水）引。来客（以下、記述ナシ）。横浜左右田金作氏の葬式ニ付、会葬石山氏代理す。

三月三十一日 辛酉 水曜 晴。

午下早々、川田氏へ行。夫より築地聖路加病院に宮原茂子を訪ふ。はしめて逢ひたれと愛らしきよき嬢にて、熱度も四十度の上と云。其つかれなとも見えす、さわやかに咄しなとして、予の見舞ふたを大に悦はれ、看護婦も深切らしき人にて先々安心。然しこの病人今一度全快させ度と本日より祈願にかゝる。泰、青梅より帰宅。箱根宮之下山口仙之助死去ニ付弔詞出す。

来客、林かよ、大宝新子、稲山千代。
発信 大宮尼え。

（四月）

四月一日 壬戌 木曜

朝、散歩して墓参す。午下早々、宮城え参る。万里小路典侍御局にて、幸子さま神経痛にて御引籠、御側にて種々御咄し共致し、御間のもの等いたゞき、ゆる／＼として四時過帰宅す。

四月二日 癸亥 金曜 晴。

朝、散歩して姉小路典侍さまを訪ふ。本日九時御出門にて、陛下学修（習）院御幸在らせら

るゝに付、良子様と御同道申上て拝観す。よく拝したり。それより帰宅。終日揮毫。来客（以下、記述ナシ）。正子、早苗と津田え行、一泊す。

四月三日 甲子 土曜

朝、散歩して帰。揮毫ものす。来客、佐藤柳子、佐藤静子、角田涼子、薄井いせ子。朝十時頃より雨ふり出して終日不止。正子、早苗、今一夜泊ると云。弘も雨にて山根氏にて一宿。朝より相思鳥逃て、雨中一日かゝりにて竹に先にもち付て取ふとすれと、遂二不取。
受信 房州いく子より。岩浪稲子より。

四月四日 乙丑 日曜 晴。40（度）。時候はしめて暖気ニ相成たり。

朝より漸雨やみたり。揮毫ものす。来客、小倉嘉代子と母と、正木倭文子と母と、陸軍次官大島夫人、坪井久馬三博士夫人、宮原細君、竜三重子、辻重四郎、別府徳子、敏子とにて、半日来客つゝきたり。正子帰宅す。

発信 石井初子え。

四月五日 丙寅 月曜 晴。夜大雨。62（度）。

朝、散歩して帰。来客、佐竹音次郎、松浦伯家従森初之助、笹川菊子、安達鈍、水上美都母と、藤田藤枝、伊東きり子 姉と、小能四七子、星野錫細君と鶴子と、田村源子、貞子、杉下清 其母と、高木春子 其伯母と。弘、津田精、弘人を連て来。角田川ホートに行。

発信 今西君子、大学病院に入院ニ付見舞出す。

四月六日 丁卯 火曜 雨。

朝より生徒続々来校す。八時、旧生徒一同式場に集る。始業式。校長勅語拝読、次、校長挨拶、次、主事大東学校心得之演舌ありて、次、李子申聞等等あり。旧生徒の対面済て、新入生との入替りて、父兄たちも席に就く。十時式畢。新入生百七十名、全部七百に及ふ。実に盛大と云ふへし。此時より空晴わたりて暖かに成。花始て開。

四月七日 戊辰 水曜 陰。50（度）。寒し。午前十時より雨になりて、夜中迄もふりしきる。

朝、散歩して帰。課業。はじめて四年乙絵画教授す。午下早々、河田氏え。それより姉小路良子様を問ふ。御不在中にて、閑院宮に詣し御息所に拝謁す。御庭の花もはや見頃にて、若宮様御書齋にて御談話申上、御合のものいたゞきて退く。また新樹典侍さま伺ひ候。御病気もはや御全快なから、やはり御尊に御静養にて、種々御咄しす。此時、姉典侍さま入らせられて、共に御談話申上て、御同様帰宅す。赤阪北白川宮辺の桜花尤よし。雨中ながら花みて帰る。

四月八日 己巳 木曜 晴。

課業。四年甲始て絵画の教授す。来客、中根米。閑院宮御使沓沢佐七、恭宮御卒業証書、及御書、御和歌、御画等さし上る。黒田茂子様にも右同様さし上る。予、五時頃より江戸川の桜をみる。今二、三日早し。本日房州より重たけ（威）来る。

四月九日 庚午 金曜 晴。

始業日。朝、堀田伴子さま、和子さま、松平頼子さま、角田、川むら、五人稽古す。午下之分三十二人来る。みな稽古して帰。本日ハ予の誕辰二付、職員十五ヶ年以上勤続之功劳を章表を、幸村氏、宮内氏、多氏三人に金廿五円ツゝ、校友会より銀時計一箇ツゝを記念として授与す。此日、やまと新聞に跡見女学校の門馬、中根の事出づ。

四月十日 辛未 土曜 晴。

朝、牛天神え参詣して所々の花をみる。課業例の如し。来客、安田千代、豊子同様、中山幾子、伊藤富貴子、文子と、石山すま子。

四月十一日 壬申 日曜 雨、后晴。

昭憲皇太后御一周年祭二付、当校ニテハ式場に祭壇を設ケ靈代神饌を備（供）え、校長はじめ職員一同参烈（一列）、生徒一同参集、拔行事李子、校長拔の言葉を申す。順次神、玉串をさゝけ、畢而主事、皇后宮の御逸事を演舌す。遥拝式畢、一同退散。

四月十二日 癸酉 月曜 陰、后雨、晴又雨。

朝九時より青松寺え参詣す。七時済て帰。雨甚。

四月十三日 甲戌 火曜 晴。 青松寺にて昭憲皇太后の御追悼読経、薰風会より。

朝九時より青松寺ニ参詣す。昭憲皇太后御羽車御渡御。二重橋外にて拝観。御霊やいかにおはすらむと只々涙にくれたり。青松寺、五時畢。予、李子、雨宮と共に赤坂わたりの花けふのみ咲揃ふたるをとて、閑宮、伏見、北白川宮辺より電車の花見して江戸川の花を見、散歩して礒川学校の新築をみる。実に宏大麗しくて、教場不残見る。

四月十四日 乙亥 水曜 雨。

朝八時前より青松寺二行。列坐、究而大困雑、容易ならぬ事、朝施餓鬼、畢而后下説経、畢而帰る。

*究(極) 　　*大困雑(大混雑) 　　*后下説経(午下説経)

四月十五日 丙子 木曜 晴。

朝七時より青松寺に参集する。午后六時帰。

四月十六日 丁丑 金曜 晴。

朝七時より青松寺に参集して、夜十一時帰。

四月十七日 戊寅 土曜 晴。夕景より雨ふり出したり。

朝八時より参集す。本日ハ結願日にて朝順道、畢而東照宮三百年法事大般若経。畢而予願主にて京極艶子、田中春子、一条良子十七回、山形菊七回忌、武者小路万子七回忌法事。姉小路公義別法事、李子より。畢而后、説教、畢、晩飯、后、順道灌頂式、畢、須弥壇に登りて仏の子となる。時、十一時廿分にて雨中也。帰るに電車なきに付、中止となる。

*七回忌(一回忌) 　　*説教(説経)

四月十八日 己卯 日曜 雨。

朝早起。昨日より宅食堂其外裝飾出来上り、軒に造花藤に提籠をつるして奇麗也。午下早々雨中ながら来客四十八人、其外、付添の人にて六十人余。余興七番、終而食堂にてサイド、御すもし、箱入サンドリツチ、柏餅、串だん子、みかん等也。次に福引はじまり、子供の悦ひ一方ならん。婦人画報社写真撮影す。五時全畢。

*みかん (蜜柑)

四月十九日 庚辰 月曜 雨。昨日より雨ふり通したり。
朝、課業例の如し。来客、加茂とみ子、鈴木千代。

四月二十日 辛巳 火曜 雨、后陰。

朝より出校、昼迄する。午下、恭子女王御稽古はしめにて、茂木恒子も来る。来客、朝倉はな、加藤寿子、萩珠子母、館野、加藤信子、其姉渡辺政子。

四月二十一日 壬午 水曜 雨。

課業例の如し。来客、鈴木泰子、勝子、成川孝子、相川勝治氏。正子、津田え行、一泊。

四月二十二日 癸未 木曜 雨。正午より晴、珍らし。

課業例の如し。

四月二十三日 甲申 金曜 陰。

朝より校外生稽古する。午下之分も三十壱人稽古する。来客、箕作博士細君。

四月二十四日 乙酉 土曜 晴。

課業例の如し。来客、橋本太吉、吉田辰江。本日始めて黒田清暉君、予の肖像にかゝる。夕、散歩して帰。松平正直男葬儀ニ木村氏代葬す。

*黒田清暉君 (黒田清輝君)

四月二十五日 丙戌 日曜 晴。

朝、山科禅師、外大学生と来る。暫く咄して帰。予、李子と同じく三越三行。人形もとめて帰。酒井伯を問ふ。御病君ニ御目ニかゝりて暫く御談話する。御建築之御立派なる実善美を尽さる (衍) れ驚き入たり。すへて御出来上りにて不残拝見して帰。廿八日ニ志賀氏参られる約束ニ付、予も参る事に約束す。

四月二十六日 丁亥 月曜 晴。 黒田侯御結婚御披露会、午下三時二。

課業例の如し。午下二時半より、予、李子と同しく華族会館にて黒田侯御結婚御披露会にて、余興、狂言二番、松ゆつりは、止動方角。済て食堂開け、侯爵の挨拶ありて、来賓を徳川家達公演舌ありて、賑々敷済せられる。此時六時。それより築地青陽軒に行。角田氏之披露会にて余興最中、活動写真等にて、夫より食堂開らけて、媒酌人片桐之挨拶、次、角田氏、次、二、三人の演ありて食事、済て余興活動にて散会、時十一時也。

*松ゆつりは(松樸) *築地青陽軒(築地精養軒)

四月二十七日 戊子 火曜 雨。

朝より学校出勤。午下、恭子殿下成らせられる。茂木恒子も。三時頃より神翁氏二行。奥歯二本抜てもらひ、細君及きよ子もてなしにて五時過帰。

四月二十八日 己丑 水曜 雨。

課業例の如し。午下早々、河田氏え行て帰。三時、黒田先生御出にて肖像にかゝる。第二日目。五時御帰り也。雨少しも不止。約在て夜七時より酒井伯を問ふ。志賀重昂氏も来られて、病室にて種々なる談話ありて、伯も大ぬ(に)悦に入られ、十一時帰。靖国神社大祭日。

四月二十九日 庚寅 木曜 晴。 45(度)。

靖国神社大祭二付学校休業す。朝より揮毫もの。心経額面、外二箱書付等なり。来客、酒井夫人喜美様。

四月三十日 辛卯 金曜 晴。

朝の校外生済て、午下も稽古する。三時より築地水交社に行。海事協会十五年総会二会す。時間おくれにて、総裁殿下も還御の跡にて、食事して帰。帰途、聖路加病院に宮原茂子を問ふ。顔面も前と違ひ、よほと元氣も附きたる様に見請たり。三月三十一日より本日にて一ヶ月間祈禱する。満願なり。

(五月)

五月一日 壬辰 土曜 晴。夕景より雨ふり出したり。

朝、墓参して帰。課業例の如し。来客、江守かね 其母と、高津達、石原松枝祖母、橋本礼女。

五月二日 癸巳 日曜 陰。寒し。

空陰にして今にも雨にならんと云日なり。午下早々、北白川宮に詣して、宮様、御息所様、富君様にも拝謁仰付られ、種々御談話伺ひ、宮様には本日三時四十分汽車にて満洲方面に御見学ニ付御暇申上る。拈子女王様ニは近々二荒様と御結婚ニ付、御祝もの献上する。拈子様にはやすの宮内親王様ニ召され御不在中也。暫時にして退出する。重たけ、本日房州より帰着する。来客、高見沢りき。三重の土井氏より金屏風着。

*やすの宮内親王様(泰宮内親王様) *重たけ(重威)

五月三日 甲午 月曜 晴。

課業例の如し。今西君子を大学病院に訪ふ。御両親にも面会す。少しよき方に向ひたるよし也。

五月四日 乙未 火曜 晴。

朝四時、重たけ帰房す。恭宮成らせられる。茂木恒子も。来客、今西たね子、御礼に来る。

*重たけ(重威)

五月五日 丙申 水曜 晴。

はしめて袴を着る。朝、課業例の如し。午下早々、河田氏に行。堀田伯、初節句御祝ニ付、予、李子と招かれる。御客、鍋島子、万里伯をはしめ御親戚三十名計。余興もありて食事万端鄭重なり。十一時帰。

五月六日 丁酉 木曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。来客、伊藤静江。佐藤ソフィ来る。白国え寄附金拾円を出す。本多美代子。

五月七日 戊戌 金曜

研究生稽古日にて昼迄。午下之分、三時迄。

五月八日 己亥 土曜

朝、課業例の如し。

五月九日 庚子 日曜 晴、后雨。

課業例の如し。午下三時比より挙家一同、長尾収一銀婚式ニ付招かる。大饗応にて賑々敷、夜十一時帰。

五月十日 辛丑 月曜 晴、夜雨。

課業例の如し。午下二時より上野精養軒ニ於て国民新聞廿五年記念祝賀会ニ行。種々余興ありて後、式場にて大隈伯をはじめ大臣方演舌ありて、食事開かる。大盛会。済て帰。直ニ新田氏を問ふ。夕餐を呼れて帰。

五月十一日 壬寅 火曜 雨。

朝、散歩して帰。恭宮成らせられる。茂木恒子も。

五月十二日 癸卯 水曜 晴朗。

遠足会。朝五時車にて両国ニ行。生徒、職員来り会す。六時三十分発汽車にて千葉長者町長者館ニ行。汽車中三時間。新緑奇麗、天晴朗心地よし。みな珍らしき風色にて一同悦ひ究りなし。九時、長者館ニ着す。二階建三軒に生徒充滿して、松林中に筵を敷て昼餐を食す。茫々たる波濤の前に小川あり、蛤などあさるもあり、遊ひには至極よし。二時半一同集りて出立す。種々なる色絹笠の二丁目（衍）余もつゝきて、此辺の人々はしめて見たると云。女学生団体はしめ也と云。大平倶楽部の主人、是非御立寄を願ふとて、それえ立寄、休憩して停車場に行。老人の病者もなく無事、六時両国に着、退散す。

五月十三日 甲辰 木曜 晴、夕景より雨。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下、高輪毛利公園遊会ニ行。御庭擲燭真盛り、新緑したゝ

る如し。所々余興場あり。公御夫婦久々にて御目にかゝる。モギ店も所々にて食事はしまりて五時帰。

*擲燭(躑躅) *モギ店(模擬店)

五月十四日 乙巳 金曜 晴。

研究生稽古日。朝の分済で、午下之分、三時畢。かねて約あり。金富町江守善六氏ニ招かる。予、李子と。氏之建築、数奇をこらしたる、実に金にあかして善美趣味、主人の意志擦(察)せらる。実ニ結構也。外ニ客ハ高林五峰夫婦と娘にて、画家広東氏、高橋儉ゲウ(檢校)、かね子、八重子の三曲ありて、食事も実ニ美を尽されたり。畢而席上書画ありて、十一時帰。

五月十五日 丙午 土曜 晴。夜雨。

訃音、岡崎子死去。

五月十六日 丁未 日曜

朝、植物園ニ行。十一時過迄遊ぶ。午下、芝青松寺薫風会ニ参る。高科師説教ニ座聴聞して帰途、帝劇に行、正子、寿子も。森律子、女優風せい(情)よく理想通りを移してよし。十一時帰。

五月十七日 戊申 月曜

朝三時半、博進舎(ママ)火。朝三時半、博文館大火。大雨中、北東風にて火子すさまじ。課業例の如し。来客、千田男子。黒田先生来られる、○3。

五月十八日 己酉 火曜 晴。

朝、墓参して、光園(巴)寺より博文館大火の状を見る。未だ煙り上りたり。来客、中山久仁子其伯母と。午下、恭宮成らせられる。恒子も。

五月十九日 庚戌 水曜 陰。

朝、散歩して帰。時、原町酒井伯より電話にて御主人重病之由申来る。直ニ御見舞申上る。心身意職(識)もなく、暫時枕辺ニ居りたれと、昏睡状態(態)に入らせられる。又として

若主人に御目にかゝりて帰る。来客、梶山氏。

五月二十日 辛亥 木曜 陰。60(度)。午下一時頃より雨ニ成る。また四時よりも降出す。寒し。

裕ニ裕羽織にても。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下四時より黒田先生来られて予の正服の像にかゝる、○4。

五月二十一日 壬子 金曜 晴。62(度)。

校外稽古日。松平、堀田、角田、河村、大島のみ。来客、斎藤仁子。午下之稽古済て、酒井伯の病を問ふ。若主人、及前田夫人にも御目にかゝる。やはり昏睡状態(態)にて面白からすと申され、暫時にして帰。

発信 大分佐野氏、下渋谷安藤喜一郎え。

五月二十二日 癸丑 土曜 陰。夕景より小雨ふりはしめ。54(度)。

課業例の如し。

五月二十三日 甲寅 日曜 雨。

朝より揮毫ものす。来客、竹田政智、竹子と御礼ニ来る、橋田はつ子母。夕景、泰帰宅す。岐阜県遠山愛子え返書す。房州いく子えも。いく子より覆盆子着。

受信 房州いく子より目刺小包着。

五月二十四日 乙卯 月曜 晴。摘要 第十三回校友会執行。

昨夜よりの雨きづかはしく、朝四時起。天晴、先々安心。昨日より上野精養軒に準備。予ハ正午より行。午下一時迄ニ会員続々来集。一時半、鈴報、会長挨拶。次、李子も。余興ニ取かゝる。一、太神楽、二、吉(芳)村伊十郎長唄秋の色種、三、西洋奇術、四、勧進帳、五、二わか(俄)。畢、食堂開く。二階立食、現生徒御弁当。此余興中、刺団子、甘から煎餅、サイタ、御茶と。来会員八百七十人、実は大盛会。五時済。

五月二十五日 丙辰 火曜 晴。

朝五時、重たけ（威）房州へ出立する。予、牛天神へ参詣して帰。○5、午下黒田先生え（衍）来られる。訃音、伯爵山田顕義妻竜子廿三日死去。廿八日葬儀。訃音、佐藤密妻澄子廿一日死去。

五月二十六日 丁巳 水曜 晴。

課業如例。午下早々、川田氏へ行。○6、黒田先生来られる。夜九時、閑院宮妃殿下、岐阜より還御。東京駅迄奉迎して帰。箱（函）館船場二中瀬徳定え端書出す。発信 大坂唯専寺え小包物、は（端）書と出す。

五月二十七日 戊午 木曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下四時より山田伯二悔二行。英夫様、及竜子之妹さま二御目ニ懸りて臨始（終）の御模様も聞、参拝して帰。万里家に智子さま眼病を問ふ。已而帰。帰途、夕立大雨にて帰宅之比全晴たり。夜月清し。

五月二十八日 己未 金曜 晴。

朝、散歩して帰。稽古。朝、午後共稽古する。酒井伯之病を問ふ。御子息様え御目にかゝる。此両三日前より意職（識）もはつきりしてよほと快方之趣、すへてよろしき由承りて大めに安心々々。近藤氏にも逢而、みな大めに悦居り候。

受信 朝鮮福田氏より新茶着。

五月二十九日 庚申 土曜 晴。 85（度）。

課業例の如し。○7、黒田先生来られる。あつさのはしめにて単衣をきる。

五月三十日 辛酉 日曜 晴。 84（度）。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下三時より橋岡氏二行。素謡会にて夕景帰。来客、濃州山田与十郎、妻とら、二男三郎。発信 神戸早川氏え。

五月三十一日 壬戌 月曜 晴。夕景より雨ふり出し、豪雨嬉し。
課業例の如し。

(六月)

六月一日 癸亥 火曜 雨。65(度)。

課業例の如し。午下、恭宮成らせられる。二時半、閑院宮え参る。御息所、御画遊はさる。五時過帰。房州より鯉佃煎(煮)着。御寺御所よりそら豆着。

発信 土井田鶴より晩茶着。

六月二日 甲子 水曜 晴雨不定。

課業例の如し。午下、河田氏え行。閑院宮え参る。五時帰。来客、加藤鎮之助。房州跡見え返書出す。

発信 御寺御所え海苔小包出。

六月三日 乙丑 木曜 晴。

朝、散歩して帰。訃音、佐野延勝男二日薨去。

六月四日 丙寅 金曜 晴。風はげし。摘要 午下二時半迄二閑院宮邸ニ参る事。

朝、散歩して帰。本日之稽古休業す。午下、閑院宮え詣し、愛国婦人会支部長を召れ、妃殿下、東伏見宮妃、伏見宮妃、梨本宮妃殿下成らせられ、御倍(陪)食仰付られ、五時退出。

六月五日 丁卯 土曜 晴。夕景小雨、已而晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。○8、黒田先生来られる。夕景、子供等連て、八人、白山上迄盆栽を見二行て、帰り雨に逢ふ。

六月六日 戊辰 日曜 晴。85(度)。摘要 正午より后四時迄、後樂園參觀者之指導、及取締方。

如約、午刻より後樂園二行。愛国婦人より示(指)導者少なく三人計にて參觀者続々あり。新緑之庭園殊更絶景。大食堂も建築ありて観音堂、白糸滝、徳仁堂、円月橋、元のまゝ樹木繁茂して古色蒼々。一週(一周)して二時過帰。

六月七日 己巳 月曜 雨。

課業例の如し。来客、吉田千代、其母と。

六月八日 庚午 火曜 晴。

課業例の如し。来客、秋田千田勇子、土井早苗、宮内黙蔵。火曜、恭宮御休みにて茂木恒子のみ。

六月九日 辛未 水曜 雨。終日雨ふり通したり。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下早々、河田氏へ行。帰途、姉小路良子様を問ふ。御不在にて不逢。来客、小川米子、津久居柳子。

六月十日 壬申 木曜 雨。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下早々、河田氏へ行。姉小路良子様を訪ふ。御不在。

六月十一日 癸酉 金曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下、閑院宮に詣し、御息所様御画拝見して、四時過帰。帰途、新樹典侍様を訪ふ。暫時閑談して帰。加藤鎮之助え楠公夫人伝題字、及画題もの出す。

六月十二日 甲戌 土曜 入梅 雨。

朝、課業例の如し。来客、斎藤仁子、房子縁談二付、愈正式二御請二申来る。橋岡来る。はしめて稽古する。午下四時過より、予、正子、寿子と帝劇に行。白国同情会二付て也。

六月十三日 乙亥 日曜 雨。

朝九時、予、下瀬氏え行。勝千代さま二逢。斎藤氏より、正式に縁談二付愈御請申入ル。右母御も大に悦れ種々談話して帰。来客、久米民之助、過日之御礼ニ来る。泰、神戸より帰。早苗の誕生日祝二付、静子、加茂勝子、すみ子、寿子、やす子、早苗との六客也。発信 大阪今西林三郎え書をよす。

六月十四日 丙子 月曜 晴。

課業例の如し。

六月十五日 丁丑 火曜 晴。

朝、墓参して帰。朝(浅)野侯よりの色紙渡す。来客、下瀬勝千代。恭宮御休みにて茂木恒子のみ。

六月十六日 戊寅 水曜 晴。88(度)。

課業例の如し。来客、浦月子。午下早々、河田氏え行。又倉持新宅落成。本願寺婦人会相談する。此度、輪番二任せられたる広岡師の説教も有て、午下五時帰。

六月十七日 己卯 木曜 88(度)。

課業例の如し。斎藤良弼氏、神田三崎町二家出来たる二付、予、李子と招かれる。住居茶人の建たる家にて物数奇にて、間数も多くよき住居也。晚餐饗応にてゆるくと遊びて帰。此時雨珍らし。少しにて晴たり。

六月十八日 庚辰 金曜 晴。90(度)。

朝八時三十分、陛下赤羽根工兵え行幸あらせられる、(衍)に付、電車道にて生徒全部奉迎す。校外生、朝と午下と済。入門、大村静子。

六月十九日 辛巳 土曜 晴。90(度)。

朝、墓参して帰。課業例の如し。泰、寿子夫婦、神戸二行、四時の汽車にて。

六月二十日 壬午 日曜 晴。

朝、姉小路典侍さまを問ふ。腸の御なやみにて御尊上にて御咄し申上て帰。午下早々、芝青松寺薫風会ニ参詣。説教聴聞して、堀田伴子さまと同道万里家を訪ふ。浜荻典侍さま、御所御礼参りにて御不在。通房さまと御咄し中、七時御退出にて、典侍様ニ御目ニかゝりて帰。午前一時地震ス。

受信 角田年弘より枇杷着。

六月二十一日 癸未 月曜 晴。

散歩して帰。課業例の如し。

六月二十二日 甲申 火曜 晴。

朝、墓参して帰。午下、恭宮成らせられる。茂木恒子も。午下四時より高倉典侍を問ふ。暫く御談話申上而帰。黒田侯より本日三時姫君御産の御知らせ有て、直ニ参邸、御祝申上而帰。帰途、志賀氏を問て帰。

六月二十三日 乙酉 水曜 晴。

課業例の如し。本日八岡田氏休み、河田より申来る。来客、功運寺大溪徳雄、書画帖の依頼。藤井瑞枝よりかつほ(鯉)のてんぶ(田麩)、雲丹着。

六月二十四日 丙戌 木曜 雨。はしめての雨、有かたし。

課業例の如し。毎日通信記者加藤常助。藤井瑞枝えはかき(端書)と浴衣出す。角田年弘えはかき(端書)礼状出す。

六月二十五日 丁亥 金曜 雨。夜、暴風雨。

地久節ニ付休業す。相川氏来る。高倉寿子様、京都御出発に付、御見立申上る。午下六時廿分、大勢の御見立人にて賑々し。

六月二十六日 戊子 土曜 晴。

課業休む。小松宮妃故頼子殿下御一年祭二付、十時より豊島岡ニ参る。十一時御祭典。玉串を捧げて、食堂にて午餐を賜はる。十二時過帰。午下一時より浅草本願寺にて昭憲皇太后御一週
(一週)忌御追悼参拝しし(一衍)帰。

六月二十七日 己丑 日曜 晴。

早朝より揮毫ものす。午下三時より、予、李子と芝紅葉館ニ行。浜荻典侍様御送別会に御招きに相成。幸子様、秋庭院様、姉小路典侍様をはじめ万里家之人々大勢にて、余興も沢山、大賑々し。夕餐後、満月清く、此時子規二声聞く、珍らし。実に清涼いはん方なし。

六月二十八日 庚寅 月曜 晴。

課業例の如し。寿子、宇治より始て端書着。先々無事の様子也。夕方より、予、正子と新田氏え行。夕餐を呼れる。八時半帰。来客、奥田照子、ハ(ハ)リより帰朝して始て逢。昨年よりの独乙の戦争の状況を聞てよく無事なる、先天祐と云へし。

六月二十九日 辛卯 火曜 雨。

午下、恭宮成らせられる。来客、多久毎。

六月三十日 壬辰 水曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。尺五絹本式枚揮毫す。午下早々、河田氏え行。帰途、姉小路良子さまを問ふて帰。来客、下瀬勝千代。

(七月)

七月一日 癸巳 木曜 晴。摘要 橋岡来る。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下三時より宮城え参る。典侍千種様に御めにかゝりて汲泉献上を願ふ。

七月二日 甲午 金曜 晴。

朝より午後四時迄、研究生教授畢。泰、弘、寿子、神戸より帰。

七月三日 乙未 土曜 雨。

朝、課業例の如し。

七月四日 丙申 日曜 陰。摘要 黒田侯え御祝物さし上る。

黒田侯え参る。御子さま御見上申す。実二よき姫君にて、よく発育遊はされて御健全也。九条公を伺ひて恵子様と閑談して帰。閑院宮え参る。御息所拝謁して帰。

七月五日 丁酉 月曜 雨。朝より陰より夕景より雨少しふる。さむし。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下三時より、予、李子と齋藤氏え行。有約、本(日)、下瀬憲三氏と齋藤房子会见二付、下瀬勝千代、母さまと御出にて万事都合よく見会(ママ)もすみたり。先方より、会见二付箸をとらぬか吉例と云二付、御湯に御菓子位にて極々かんたんにて、談話もありて七時頃済。予等ハ跡にて夕食も呼れてゆるく。御両親ハ跡の談判に心配致されたり。九時頃帰。

七月六日 戊戌 火曜 雨。

午下、恭宮成らせられる。茂木、大村氏も。

朝、下瀬勝千代様御出にて、昨日の会见にて憲三氏にもよく気合当合致して、其返事に御出に相成。先々安心。縁談決定する。右のより(一し)一早速齋藤え申遣ス。

七月七日 己亥 水曜 雨。

課業例の如し。午下早々、川田氏え行。本日送別旁、姉小路良子様、と代と帝劇に御供する。予、李子と也。十一時過帰。本日、重威房州より来る。

七月八日 庚子 木曜 晴。

課業例の如し。朝、散歩して帰。

七月九日 辛丑 金曜 晴。

朝、散歩して帰。朝より午下四時迄、研究生稽古する。

七月十日 壬寅 土曜 雨。

朝、散歩して帰。課業例の如し。姉小路典侍、午下六時廿五分汽車にて京都帰省。見立人沢山にて実ニ賑々敷、重威も京都迄御供する。予、始挙家一同御見立する。此時、雨やみたり。都合よし。

(七月十一日、記載ナシ)

七月十二日 甲辰 月曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。来客、高階隴仙師、暇乞ニ来る。中元贈り物にていそかし。

七月十三日 乙巳 火曜 晴。

朝より中元贈りもの、凡六十軒計、本日にて全く済。午下、茂木、大村、御稽古、本日にて御休み。

七月十四日 丙午 水曜 晴。

朝、墓参して帰。課業例の如し。午下、河田氏へ行。

七月十五日 丁未 木曜 晴。 ㊿(度)。

朝より中元廻り。始、紀尾井町北白川宮へ参る。高輪北白川宮、竹田宮、黒田侯え御子さまを見て、東伏見宮へ参り両殿下拝謁して御昼飯を戴て、大谷伯を問ふ。恒子様ニ御目にかゝる。夫より帰。

七月十六日 戊申 金曜 晴。 ㊿(度)。

朝より午下之分、稽古納をなす。九月十四日火曜日より金曜午下之分取替る事申渡す。予、李子と同道、閑院宮へ参る。明十七日、季子女王御一周祭ニ付御霊前参拝して帰。

七月十七日 己酉 土曜 晴。

課業例の如し。朝、豊島岡御墓祭参拝之处、本日にて朝之授業やみ難くて不参得、残心々々。

七月十八日 庚戌 日曜 晴。

終日揮毫ものす。

七月十九日 辛亥 月曜 晴。

朝、墓参して帰。課業例の如し。来客、志賀喜代子、上海守田市郎氏夫婦来る。

受信 上海津田より書、及鷺箋（画牋）と墨到来。

七月二十日 壬子 火曜 晴。 93（度）。

朝、課業畢る。全生徒式場ニ集め校長送別之辞をのへ、主事、李子の申聞し等有て退散す。晚餐送別会。寄宿舎食堂ニ於て賑々敷相済。鰻飯、菓子碗、サイダ、氷等也。本日、重威京師より帰京一泊。

七月二十一日 癸丑 水曜 土用入。 晴。 93（度）。

朝四時起。重たけ（威）四時半出立、房州に帰る。予、散歩して帰。寄宿生帰省す。午下草（早）々、河田氏え行。本日より暑中休業。来客、梶山氏。

七月二十二日 甲寅 木曜 土用二郎。 晴。 摘要 橋岡来る。本日にて御休。

早起。墓参して帰。来客、姉小路延子、村井弦斎氏細君、石井まよ子、其子たま子。

七月二十三日 乙卯 金曜 土用三郎。 晴。

朝、散歩して帰。土井氏金屏風にかゝる。

七月二十四日 丙辰 土曜 晴。 93（度）。

微恙にて臥。来客、酒井喜美子夫人。

七月二十五日 丁巳 日曜 晴。93(度)。

来客、岩浪稻子、姉小路延子。午下五時より、予、弘と觀世夜能見物す。久し振にて袴能殊に面白くかんしたり。十一時帰。土井氏え金屏風出す。

七月二十六日 戊午 月曜 土用六日(二郎)。晴。95(度)。

朝七時より加茂氏え悔二行。丁度写真御写しの処にて、御子ハ誠に可愛らしく生て御出の様に、此まゝ残し置度思はれて、御両親の御なけきもさそと存せられ候。拝して帰り、齋藤氏え行。仕度調度も立派々々に出来て皆々みせてもらい、親ならば社と存し候。暫時にして帰。善光寺智栄尼、姉小路良子、大聖寺え書出す。小包、遠藤、大聖寺、唯専寺、願泉寺、若間え出す。

七月二十七日 己未 火曜

朝、散歩して帰。

七月二十八日 庚申 水曜 晴。夕景雨少しふり直にやむ。実に喜ひの甲斐なし。

朝、牛天神え参詣して帰。来客、実業の日本社橋本氏文吉、少女の友記者、石山すま子、貞栄子、久米の子供二人、少女画報和田雅夫。

七月二十九日 辛酉 木曜 晴。下瀬憲三、齋藤房子の結婚式執行、并披露会、午下六時、築地水交社にて。

来客、実業日本社橋本氏文吉、茂木松子使。約の如く五時、予、李子と同しく水交社二行。新郎新婦はしめ玄關に迎はれたり。始、貞水の目出度余興ありて後、食堂開かれ結婚披露会には至極涼しく美麗を尽され、八時、全畢而退散。帰路、涼風頗心地よく帰宅す。

発信 伊香保堀田和子さま、長の(野)西条平三え。

七月三十日 壬戌 金曜 晴。

朝より来客。齋藤誠之丞氏昨日の御礼に來られたり。午下、下瀬勝千代さまも同様御礼に御出

二相成。八月五日初客の御催、下瀬にて執行、御招待承諾す。夜、石山みさを病氣見舞に行て帰。内閣大動揺いたましき事也。

七月三十一日 癸亥 土曜 晴。

朝、大束氏来る。日々雲霓を祈望するのみ。

(八月)

八月一日 甲子 日曜 晴。午下五時半より始めて雨ふり出して、五分間位にて止。実、雲霓の甲斐なし。夜明かた大雨降て、実に天に祈りし甲斐ありて有難しとも有かたし。

朝、斎藤仁子、御礼ニ来る。弘、軽井沢え出立。正子、市川え行。予、田村氏え問ふ。それより芝万里小路え行、幸子さまニも御目にかゝりて、暫時にして御所え御参り也。閑院宮様え参る。昨夜、京都より還行成る。御息所様、恭宮様、拜謁して、此度御降嫁之御咄し共伺候。愈九月三日の御治定也。御昼飯戴て帰。

八月二日 乙丑 月曜

朝八時より石山基陽氏を問ふ。閑談時を移す、十一時迄。それより新田氏を問ふて昼飯を饗に逢ふ。此時しはし雨ふる。土用長瀬と云雨にて、作物稲には結構なる雨也。晴雨定まらず。

八月三日 丙寅 火曜 晴。午下二時頃より夕立雨ふる。夜又大雨。

朝より揮毫ものす。来客、森律子。午下六時より斎藤氏の招に応して斎藤氏二行。夫より斎藤夫婦、下瀬勝千代、志賀喜代子、予、李子と亀清楼にて夕餐を饗せられ、鄭重なる賑(振)舞にて川岸端にて殊更涼氣を覚え、九時過帰。

八月四日 丁卯 水曜 晴雨不定。

朝、揮毫ものす。来客、浦四三子。

発信 五島善子、巢山茂雄え小包。長野西条え返書出す。

八月五日 戊辰 木曜 終日、驟雨不定。下瀬氏より招待、午下六時。

朝、散歩して帰。下瀬氏へ行。新夫婦旅行。齋藤氏え始めて房子帰か（ら）れ候二付、齋藤夫婦、志賀夫婦、下瀬の伯母なる人と予と也。李子ハ気分あしきとて不参。晚餐を饗せられ、夫婦の様子も至極宜しくて先々安心。十時帰。

八月六日 己巳 金曜 雨。驟雨度々、暑氣一層甚し。

朝より揮毫ものす。来客、齋藤仁子。

閑院宮附宮内属より、

恭子女王殿下、来ル九月三日、子爵安藤信昭殿え御帰嫁被遊候間、此段御通知申進候。敬具。

大正四年八月五日

閑院宮附宮内属

跡見花蹊殿

八月七日 庚午 土曜 晴。

早起。散歩して帰。来客、山根文子。朝十時地震。

発信 足尾秋元すわえ。

八月八日 辛未 日曜 晴。此夕、少雨あり。

朝六時五十分、上野発汽車にて、広橋寿子、鷺田静子、雨宮、外女中付添て軽井沢二行。来客、下瀬憲造氏御礼ニ来る。泰、石神井へ行。正子、暑中廻りに行。来客、芝功運寺、書画帖取に来る。

八月九日 壬申 月曜 立秋日。

朝八時より車にて代々木大炊氏を訪ふ。石山氏、師前様も御目にかゝりて、久々の御もてなし、それに清涼なる風に心地よく清々し。朝の内に御暇申心得の処、御昼飯呼れ、雑談に午睡もして湯あみして、四時帰。夕景より大雨ふり来り夜中も甚し。

八月十日 癸酉 火曜 雨。

李子、朝六時五十分の汽車にて裏松千代子夫人と共に軽井沢二行。雨を冒して出立す。八時頃

より空晴たり。終日、揮毫ものす。

発信 木津跡見え書をよす。

八月十一日 甲戌 水曜 雨。91(度)。

朝、雨暫時にして霽。八時より、予、閑院宮え参る。恭子様え御祝の反もの、李子よりも外二松魚、松竹梅の飾もの献上する。暫時にしてまかる。来客、黒木仲、子供つれて。正子、早苗と代々木え行。三日間程滞留のはつ也。

発信 長野西条え断の手紙出す。

八月十二日 乙亥 木曜 晴。90(度)。

朝、散歩して帰。李子より端書着。終日、揮毫ものす。茂木松子より色紙取に来る。訃音、城氏母死去。

発信 返書十三軒え出す。軽井沢李子、栄子え。

八月十三日 丙子 金曜 陰雨不定。

朝、散歩。白山え参詣して帰。正子、早苗、代々木より帰宅。

八月十四日 丁丑 土曜

朝、散歩して帰。終日、揮毫ものす。

八月十五日 戊寅 日曜 陰。

朝、散歩して帰。墓参也。揮毫ものす。裏松千代子夫人より電話にて、本日軽井沢より帰着にて、李子よりの言伝にて是非一度軽井沢え来る様との事也。来客、宇都美寿子。

八月十六日 己卯 月曜 陰。少雨ありて直に止。

朝、散歩して帰。揮毫ものす。実業日本社橋本氏。下瀬勝千代、同房子、御礼に来る。大東氏、斎藤仁子、御礼に来る。土井早苗より端書にて屏風、洋画共十三日着のよし申来る。受信 大坂若間より山出し昆布着。

八月十七日 庚辰 火曜 雨。朝雨、后晴。89(度)。

朝より揮毫ものす。

発信 大阪若間え返書出ス。

八月十八日 辛巳 水曜 晴雨。89(度)。 摘要 岡田氏始まる。

朝、散歩して帰。正午早々、河田氏え行て帰。午下三時過より中村元嘉氏え行。此日、飯田氏、河内駿(一検)事氏も来られて、皆々白人離れの天狗連にて素謡はしまる。始、河内氏 杜若、次、葵上 予、隅田川 飯田氏、当摩 河内氏。夕餐後独吟等にて久々に面白し。八時過帰。此時驟雨あり。閑院宮御使、来ル廿四日御夕食ニ被召。同日午後五時参邸之事。受信 藤岡カズより朝鮮あめ着。

八月十九日 壬午 木曜 晴。90(度)。

早苗、辰子、朝六時五十分汽車にて軽井沢え行。予、八時より閑院宮え参る。御息所様、恭子様ニ拝謁して、予而仰付られたる若松丹鶴之画さし上る。御祝献上もの拝見す。それより芝万里さまえ幸子様を伺ひ候処、御参内にて御留守。兼房様に御目ニかゝりて午餐を共にして忒時帰。来客、三輪市太郎氏。

受信 李子よりは(一端)書着。

八月二十日 癸未 金曜 晴。90(度)。

朝、有約て、東京日々新聞神近市子、斎藤菊寿、角田栄子、中根、石子。午下三時後より驟雨雷鳴、落雷ありたるならんと思ふ。強雨甚し。五時頃、雨も止て雨後爽快なり。本日より万里小路智子眼病平癒を祈願する、百日間。

八月二十一日 甲申 土曜 晴。90(度)。

朝八時より、予、弘と同じく横浜原氏ニ行。始て京横電車にて行。久々原氏を問ふ。富太郎氏、

箱根避暑留守中にて、安子、及西郷氏夫婦、子供も皆々無事。種々語り合、午餐を共にして、午下二時過より挙家一同庭中散歩。秋の千草を見て、萩ハ少し早く、先来月始め頃盛り也。庭のお八館、本年一月焼失したるとて、はしめて聞、残念々々。三時頃、自動車にて送られ、横浜駅より電車にて帰。此頃雨。

受信 信州停車場前小木曾増子より依頼物着。

八月二十二日 乙酉 日曜 雨、已而晴。

朝より揮毫ものす。

受信 京姉小路さまより書至。李子より端書着。

発信 小木曾氏の依頼物、直ニ断る。

八月二十三日 丙戌 月曜 雨。

朝、散歩して帰。終日、揮毫ものす。

八月二十四日 丁亥 火曜 陰。 摘要 閑院宮御夕食、被召、午後五時参邸。

朝、散歩して帰。揮毫ものす。午下四時半より閑院宮御舗宴ニ参殿。両殿下、恭子女王、御陪食仰付らる。客ハ、鍋島成子、吉田、松井増と予と四人にて、御客間にて種々御談話中、御食堂にて日本御料理、結構。他人交らす昔今の御咄し、御旅行中の出来事、失はい(一敗)談にて面白く大笑々にて御食宴済せられる。両殿下より、永々の教育に従事して今日ニ至て満足之至と仰せられて、銀製花瓶一对、白縮緬一疋賜る。八時頃退出。此前一寸雨ふる。已而止。

八月二十五日 戊子 水曜 晴。夜小雨。

早起。牛天神え参詣して帰。午早々、河田え行。石山陽さまえ行。昨夜、日光供奉畢而帰らる。暫時にして閑院宮え参殿、昨日之御礼申上る。已而退出。

八月二十六日 己丑 木曜 晴。夕景より大雨、交雷。

朝餐後早々、予、泰、弘、石山四人連にて落合長尾氏を訪ふ。長崎村之地所をみる。長尾御夫婦と同行にて、眺望もよく、此辺にて一番高き場所、便利もよさうにて、先々取究(極)る模様也。夫より直ニ帰。李子及同行人一同、無事ニ帰着。上野着三時四十分。

八月二十七日 庚寅 金曜 雨。大雨。

朝、散歩して帰。返書、土井早苗え、桜菊会本部え断状、今西え礼状、五十嵐隆圃え、藤岡力ズえ、掛川田鶴え、大治西沢え、満洲野老山え。午下、弘、軽井沢え出立す。

八月二十八日 辛卯 土曜 晴。 摘要 閑院宮、午后四時、李子同伴参殿之事。

朝、散歩して帰。来客、中村元嘉氏。午下三時半、予、李子と同しく閑院宮様え参る。秋山様はしめ、外の先生方皆御揃にて、早速、御息所殿下、恭宮殿下、一同ニ拝謁を給ひ、予、一同に替りて恐悦御祝義申上る。此時、宮様より一同え白絹一疋ツ、御下賜成て、次、食堂にて日本御料理賜る。五時半比退出す。夜、本郷辺え散歩して帰。北白川宮より御反もの、御目録御下賜相成。

受信 酒匂藤井より枝豆沢山着。

八月二十九日 壬辰 日曜 晴。

朝、本郷辺散歩して帰。此時、漸秋気覚る。揮毫する。朝、閑院宮より御使にて女中え御下賜金を(以下、記述ナシ)。

八月三十日 癸巳 月曜 晴。

朝より揮毫ものす。

受信 大阪柏原種より春日の煎餅着。

八月三十一日 甲午 火曜 晴。

朝、散歩して帰。揮毫ものす。

(九月)

九月一日 乙未 水曜 晴。 摘要 朝八時東京駅発にて、万里小路幸子様御帰京。

朝七時より東京駅二着。万里幸子様御見立の人々にて賑々し。幸子様と御同行申上候。停車所

段々より登らず、イルベータにて上る。八時迄待間に、予、李子、酒井喜見様と国府津迄御同行の約束なる。皆さまと引分つて御無事御発車にて、天気ハ晴朗、心地よく、幸子様と国分府（府津）にて御別れ申上て、酒井夫人ハ大儀にて。電車にて、早川亀やに滞在の津田を問ふ。子供等も大悦にてこゝに一泊。李子、鎌倉橋本氏え一泊す。

九月二日 丙申 木曜 晴。

朝四時起。日の出を拝む。久々にて海の眺望もよく爽快也。朝、一同と観世音に参詣して帰。午飯済て二時より李子来る。昨日、国府（津）にて依頼の風呂敷置忘れて心配す。夕飯も済せて、五時、亀や出立。国府（津）七時之汽車にて帰。九時十分着。迎ひの車来りて、二人共無事九時半頃帰。

九月三日 丁酉 金曜 雨。 摘要 午下一時御発興、閑院宮恭子女王御降嫁、子爵安藤信昭氏え。

朝、散歩して帰。十一時より閑院宮え参る。恭宮殿下御降嫁御発興、一時。一同御玄関にて御見上申す。御童、白地赤御紋散しの縫取、濃大腰にて御盛装美々敷、御出興なる。御跡にて御息所様拝謁、恐悦申上て退出す。雨甚し。

九月四日 戊戌 土曜 雨。終日雨ふり通したり。 64（度）。

朝、散歩して帰。終日、揮毫ものす。

発信 小原田（田原）津田えチヤラメル出す。

九月五日 己亥 日曜 雨。夕景より大雨。

朝、大木伸子、本日より入学試験に来る。子爵安藤信昭、同恭子より、来る十日午後四時より華族会館ニ於て披露会招状至る。午下四時より、予、寿子と帝劇に行。面白くみたり。十一時帰。此時雨止。

九月六日 庚子 月曜 晴。 90（度）。 摘要 授業始をなす。

朝七時半、職員生徒式場に集る。校長之始業の言は（葉）有て、大東氏閑談（ママ）なる申渡

し有て、各教場に入て本日ハ九時にて畢。

九月七日 辛丑 火曜 雨。90(度)。

朝、散歩して帰。課業例の如し。本日ハ井上馨公葬儀、日比谷公園にて執行。公の葬義(儀)らしき強雨にて、会葬者困難可察。正子、小田原津田氏へ行、一泊。来客、紀州尾崎栄之助、跡見玉枝。

九月八日 壬寅 水曜 晴。摘要 氷川神社祭典。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下早々、河田氏へ行。観世えも行て帰。

九月九日 癸卯 木曜 雨。晴雨不定。90(度)。摘要 橋岡、稽古はしめ。

朝、氷川神社ニ参詣して帰。課業例の如し。

九月十日 甲辰 金曜 雨。89(度)。

本日より朝の研究生稽古始め。角田兩人ト大島氏のみ。

九月十一日 乙巳 土曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下三時より閑院宮え御礼に参る。此時、恭子様御ぐし清し(ママ)に還御相成りて、御息所と共に拝謁、種々其後の御模様御咄しにて大ゐに安心々々致し候。それより芝万里小路え智さま眼病を問ふ。御珍らしく少しハ御見えのよしにて、実に観音の御加護と有難く思ひ候。夕飯呼れて帰。此日李子に、予、愈田舎住居決心の事申通し候。李子も承知いたし候。学校教員一同打寄、花の会の協義ありて、其席ニ予志望なる生徒服製(制)の義申談し、紫紺の単をきせる事、先決定す。此日より天本晴と成る。受信 原安子より弘の義二付よき返事あり。

九月十二日 丙午 日曜 二百廿日役(厄)日。晴。90(度)。

朝八時より、予、弘と觀世に能をみる。此途中、李子に出会って觀世え誘引す。昼弁当済て、一時半頃電話にて裏松良光子危篤と云。直ニ李子、裏松氏えかけ付る。能樂五時済て帰。李子も臨終に不逢と云。

役（厄）日大安静也。五穀豊作疑なし。

九月十三日 丁未 月曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。

九月十四日 戊申 火曜 晴。90（度）。

本日より金曜研究生稽古始めを執行す。朝八時より十時迄のうち、稽古す。午下、裏松子え悔二行。実に御臨終の早きに残念々々限りなし。原安子え御礼の書状出す。

九月十五日 己酉 水曜 晴。

朝、墓参して帰。課業例の如し。昼早々、河田氏え行て帰。直ニ下瀬氏を問ふ。本日、憲造氏出立にて、みな東京駅迄見送られて不在中也。直ニ帰。田辺太一死去ニ而李子悔二行。

九月十六日 庚戌 木曜 晴。70（度）。

朝、散歩して帰。課業例の如し。俄然七十度の冷氣にて、ふらむねる（フランネル）ニ裕羽織をきる。此夜、李子来りて泰に心中を語る。予ハ少し気分あしくて、早寝する。

発信 端書返書八通出す。

九月十七日 辛亥 金曜 小雨。

朝より稽古にて十一時済。来客、大炊駒女、山本久子 鎌倉より。此日より諸道具しらへにかゝる。

九月十八日 壬子 土曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。弘、夕八時汽車にて帰京す。

九月十九日 癸丑 日曜 晴。

朝、散歩して帰。午前八時より芝青松寺にて裏松良光子葬儀、会葬す。九時始り、焼香して帰、十一時。本日、津田栄子、子供等連て小田原より帰京二付、泰、正子、東京駅迄迎に行。一同無事帰着す。

九月二十日 甲寅 月曜 雨。

朝、散歩して帰。課業例の如し。

九月二十一日 乙卯 火曜 雨。

本今朝、津田弘視氏上海より帰着二付、栄子之一行不残、泰、正子、子供連て東京駅え迎ひに行て、一同無事帰。来客、韓国福田細君、井出百合。此夜十時半、重威廿三日比来ると云二付、直二書を出して、家のかた付困（混）雑二付断る。

九月二十二日 丙辰 水曜 晴。 摘要 愛国婦人会、本部にて。

朝、墓参して帰。午下早々、河田氏え行。閑院宮え参り、御息所様拝謁申上、明朝御渡韓被遊候二付御機嫌伺候。それより黒田清暉（輝）伯を問ふ。不在にて不逢。浦礪吉氏を問て帰。

九月二十三日 丁巳 木曜 月殊二明なり。 閑院宮御渡朝、午前八時三十分御発車。

朝七時半より東京駅二行。閑院宮両殿下御渡韓二付奉送申上る。九時帰。直二課業如例。

○此日より黒田氏、肖像にかゝる。

九月二十四日 戊午 金曜 秋季皇霊祭。晴。

朝、散歩して帰。来客、中村元嘉氏、庭の石、其外洋館の椅子、テーブル等、払物二付直（値）入なとせられたり。午後より、予、泰、寿子、石山と中野の地所見二行。地味もよく気色もよくて、大ゐに気二入たり。阿野子隣にて、同子を問て暫時休憩して帰。

九月二十五日 己未 土曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。種々諸道具仕分する。此日、中野に住する事とても不便にて伯母様には此まゝ在住にても宜しくやと、泰申出候二付、是幸と踏止まる事に決定致たり。

○黒田氏。

九月二十六日 庚申 日曜 晴。

津田弘視一行出立二付、早朝より拵にて、朝八時半東京駅出發二付、挙家見立に行。見送り人も沢山にて賑々しく、子供等一同機嫌よく出立したり。夫より、予、中村氏へ行て、椅子など約束解に行く。中村氏も大賛成にて、大安心々々。

○黒田氏。

九月二十七日 辛酉 月曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。房州重威より書至。此度中野ニ引越事ニ付、大々の不賛成申来る。それで、予ハ此地に止る（一り）而泰夫婦と正子とか中野ニ行事ニて、全く行違ひたる由申遣す。諸新聞に花蹊女史隱退と云事出て、大めに騒々敷相成たり。直ニ正誤を出したり。

九月二十八日 壬戌 火曜

朝、散歩して帰。課業、研究生稽古する。斎藤仁子、島田信子、志賀鉄千代来られ、此度の予の中野ニ行を大々の不賛成にて、昨日の新聞ニ隱退の記事出たるニ付御出ニ相成。然るに予ハこゝに止る事にて、先々安心せられたり。

○黒田氏御出。

九月二十九日 癸亥 水曜 雨。

雨ながら散歩して帰。課業例の如し。訃音、坪井素子、去ル廿五日死去のよしにて、実に其驚一方ならず。午下早々、河田氏へ行。帰途、角田氏、坪井氏を問て、両親に逢て悔みの言葉さへ涙せきあへず、実に掌の玉をとられたる御両親のなげき、おのれの残念、いはん方なく、御香を手向、最近の写真をもらひ、懐にいだきて帰る。

九月三十日 甲子 木曜 雨。

課業例の如し。家の片付ものにていそかし。

○黒田氏来られる。

(十月)

十月一日 乙丑 金曜 陰。

本日より研究生稽古、塾の図書室にて執行す。

十月二日 丙寅 土曜 雨。

課業例の如し。家内中道具万端かた付物にて大困(混)雑を究(極)む。

○黒田氏来る。

十月三日 丁卯 日曜 晴。

朝より家内中のかた付物にて多忙を究(極)む。角田氏来られて、家の事ニ付種々相談する。

○黒田氏来る。

十月四日 戊辰 月曜 晴。

課業例の如し。予の道具万端、塾の二階、李子の居間に引移したり。

十月五日 己巳 火曜 晴。朝細雨、已而晴。

朝、散歩して帰。研究生稽古日。

○黒田氏、出来上り。

十月六日 庚午 水曜 晴。

生徒全部、鎌倉遠足会。朝四時起。種々こしらへして六時出門。七時東京駅発車。惣人員六百廿二人。別仕立列車にて誠に心地よし。所々秋色千種の盛にて一入の秋のよそほひ嬉し。九時半、鎌倉に着。直二小町園二行。こゝにて携帶品を置いて鎌倉の歴史を操(探)り、昼迄二小町園二帰るはつ。予ハ橋本氏え行。始めてにて、暫時にして茂木氏別荘ニ訪ふ。栄子、恒子も大悦にて、大広間にて家の造りも数奇をこらして立派也。此日ハ三時迄遊ふつもりにて、昼飯も美味にて、食後、老女為も久々に躍をみせて呉て面白く、もはや三時近くなりて名残おしくも暇をつけて、小町え帰りて、直に停車場に行て発車。一人の病車(者)もなく無事五時

着。泰、正子、寿子ハ目白のかりや(仮家)ニ行。予ハ寄宿舎に着。此日より移転す。

十月七日 辛未 木曜 雨。

昨夜より雨ふり出して暴風雨となる。休日。予の居間にてハ種々住居よく出来て大安心。本日より住居取こわしにかゝる。

十月八日 壬申 金曜 晴。89(度)。

研究生稽古する。

発信 東洋婦人会え。中瀬徳定え。間々田幸子え。

十月九日 癸酉 土曜 晴。88(度)。

朝、散歩して帰。課業例の如し。泉会、午下一時より。海軍省より高野少佐来られて、飛行機の説明にて面白く。本日会員夥しく、それに炎熱甚しく、来客え氷水を出す。大悦。十月に氷水とは珍らし。五時半皆帰。

十月十日 甲戌 日曜 晴。

朝、散歩して帰。日々、李子もよく世話して呉て大安心。本日葉室後室の遺骨を護して挙家京都え趣るゝに付、予、李子と東京駅迄御見送りして、帰り酒井御夫婦と自動車にて帰る。正子、始て来る。

十月十一日 乙亥 月曜 晴。夜雨。

朝、散歩して帰。課業例の如し。来客、鳥尾智世子。

十月十二日 丙子 火曜 雨。

昨夜よりの雨甚し。午下、雨晴たり。研究生の稽古する。来客、万里伯、夕飯を供(共)にして八時帰られる。

受信 柏原種子より蒲鉾着。

十月十三日 丁丑 水曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下早々、河田氏へ行、姉小路を問ふ。それより石山陽さまを問ふ。貞栄さま壱人にて、暫時咄して帰。泰の家、大略こわし切たり。朝、角田氏来られて生徒常着服製（制）を相談する。理事にも通知する。紫紺色無地、真岡木綿、襟（ゑり）白と究（極）る。此夕、土井早苗来られて、九時頃迄。

十月十四日 戊寅 木曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。朝十一時、泰来りて、新田千歳昨日死去のよし申来る。実に夢か現か只々茫然の外無之、真事とハ思はれず。昨朝十一時頃と云。予、正午直ニ新田へ行。もはや入棺済にて、挙家なけき一方ならず、目も当られぬ有様也。暫時にして帰。此時、李子、正子、悔二行。此夕、予、李子、雨宮と本郷え造花菊をあつらへ、黒ぬり手桶に黄白菊を一对、千歳霊前え備（供）える。

発信 早川京子え。福田会え欠席。

十月十五日 己卯 金曜 晴。

研究生稽古日、昼迄ニ済て、来客、齋藤仁子、夕飯を共にして七時帰。此日を以て泰家取くづして、木財（材）不残中野えもち行たり。

受信 秋田千田氏より梨子一箱着。

十月十六日 庚辰 土曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。昼早々新田氏へ行。午下一時出棺。泰、寿子、李子、会葬す。予ハ出棺見送りて帰。学校にて評議員の方々、此度生徒服製（制）之義ニ付相談会開く。みな異議なし大賛成と云。予、それより橋場安堂（藤）子を始め訪ふ。新御夫婦御悦にて、恭子様御奥さまらしく何くれと御咄しにて、御居間、其外御二階など御つれ下されて、御間ものなど戴きてゆる／＼御様子も伺て、日暮御暇をつけて帰。帰途、観世音え参詣して帰。夜、井出百合子来る。

十月十七日 辛巳 日曜 雨。昼頃より降出して終日終夜をやみなし。

朝、散歩して帰。予、李子と竜明館へ行。土井早苗の招待にて昼餐を呼れてそれより歌舞技（

伎（一）に行。妹脊山 書直しもの珍らし、おつま八郎兵衛、白井権八、くらま山。十一時帰。

十月十八日 壬午 月曜 雨。

課業例の如し。終日、強雨ふりつゞく。

十月十九日 癸未 火曜 晴。

朝、散歩して墓参す。朝、研究生稽古する。新田千歳の一七日二付五時より参る。読経済て夕餐を饗せらる。予、李子と九時比帰る。

○洋館一棟、二階家一棟、物置一棟、家具

右金九百参拾六円五拾銭也にて、泰より譲受ル。

大正四年十月十九日

発信 茂木松子え。秋元すわえ。土井田鶴え。

十月二十日 甲申 水曜 晴。

課業例の如し。午下、川田氏え行。帰り、隣の小学校にて生徒の運動会を見る。年々に運動早業かん（感）に絶たり。四時帰。

十月二十一日 乙酉 木曜 晴。

課業例の如し。揮毫ものす。夕景、予、李子と散歩して本郷辺え行。造花の菊を買て帰。

十月二十二日 丙戌 金曜 晴。

朝より研究生稽古する。

発信 佐渡名畑え返却。三重久野虎生え。

十月二十三日 丁亥 土曜 陰。

課業例の如し。五年生、大典二付、御手元え献上の短冊二名々（銘々）菊花自画讀之稽古にて、八時より十二時迄。

十月二十四日 戊子 日曜 雨。雨降り通したり。

浅草本願寺婦人会三十年祝賀会、両国柳光亭ニテ執行。朝十時より会ス。午後二時式始り、會長岩倉梭子祝辞、予、代読ス。二条公、毛利安子、祝辞等有て、棚橋絢子演舌、其外有て後、余興、長唄、手しな、落語二席ありて会畢、五時也。予等夕飯を給して帰、七時。來客、依田直子。

受信 神代より蒲鋒着。

十月二十五日 己丑 月曜 雨。

此日より雨降つゝ。課業例の如し。來客、大炊御門師前様御出にて、此度芝増上寺ニテ五重相伝会に是非入会を御進に相成て、予、承諾す。來ル廿七日より。

受信 上海栄子より書至。房州重威よりも。

発信 大宮知栄、茂木松子、早川京子え。

十月二十六日 庚寅 火曜 雨。

昨日よりの雨つゝきにて午下止たれと、終日陰々たり。研究生の稽古する。古や益世より葡萄一籠着。高木藤三郎依頼の帛紗下絵揮毫す。

発信 京都弘え書を出す。

十月二十七日 辛卯 水曜 晴。

朝七時より、予、下婢竹を連て芝増上寺に五重相伝ニ入会す。増上寺大僧上(正)本年八十八、米寿の祝として、この五重相伝を執行せらる。予も始めて此法筵に会して、実に安心、金剛之信を得られ候。御説教講師、泉州堺大阿弥陀寺主職岩井智海と云、日本一と云方ニテ、実に名説教、心地よく聴聞す。四時半退散。

十月二十八日 壬辰 木曜 晴。

朝七時より、予、竹を共にして増上寺に参詣ス。第二重講議、実に有難し。感涙にむせひたり。昼迄にて帰。本日午下一時より生徒一同式場に集めて、今般通常服改正断行、紫紺色地間(真)岡木綿と定む。生徒父兄に申渡ス事一条の(ママ)校長より申暢、次ニ李子より、大東氏之談話も有て二時済。

十月二十九日 癸巳 金曜 晴。 摘要 第三。

朝、研究生稽古済て、直ニ増上寺に参詣して五時帰。午下、増上寺え参詣して五時帰。

十月三十日 甲午 土曜 晴。 摘要 第四。

朝七時半より増上寺に参詣して、午下五時帰。

十月三十一日 乙未 日曜 天長節。祝日。晴。 摘要 第五。

朝八時、職員生徒一同式場に参集。校長勅語拝読前、君か代三唱、主事之祝詞ありて式全畢。退散。

(十一月)

十一月一日 丙申 月曜 晴。

第六。朝七時半より増上寺え参詣して帰。

十一月二日 丁酉 火曜 雨。

第七満願日。朝、例刻より増上寺に参詣す。日々伝法之作法其外、口にはとてもものへかたし。有かたし共有かたし。午下四時頃、全畢。久米氏自動車にて帰。

十一月三日 戊戌 水曜

課業例の如し。

十一月四日 己亥 木曜 晴。

天晴朗、如春。課業例の如し。来客、茂木栄子。晚、予、柳町通りに散歩す。御大典ニ付家毎の飾り、杉と竹とを立、七五三のしめ白木綿かけて、正月の如し。発信 佐の(野)一秀子、早川京子、弘道会え。

十一月五日 庚子 金曜 陰。

昨夜小雨あり。朝、研究生稽古する。生徒一同式場に集て、御即位御次第を申聞せる。大東氏より、予、午下早々、代々木大炊氏ニ御礼を申、晨さま、お駒に逢て帰。家政様より御供奉にて師前さまも今晩京都行。それより元巢鴨泰之かり(仮)家二行。みな不在にて千代留主居のみ。已而帰。今晚、予、李子、其外と共に宮城前万歳御門出来二付、拝観す。実に意匠の進みたるに感心す。光明世界也。それより銀座通りの飾りにも驚々入たり。各町々毎ニ装飾をこらしたり。十一時比帰。

十一月六日 辛丑 土曜 晴。

陛下御発輦二付当校にてハ斎藤、戸谷、李子、中根、城、其外三人御送申上ル。夜三時より。八時みな帰。午下二時、久米民之助より自動車にて迎ひ来り、予、李子と同じく久米氏二行。新築開にて建築結構宏大なる、実に言語に尽されず。家屋のみにて千坪。庭中も宮内省之技師の設ケイにて御所之御庭の様ニ思はれる。御客、加藤高明、近藤廉平、豊川氏、古市氏、富井博士、前大蔵次官豊川氏、二嬢、予、李子、其外何々、芸妓十五人余にて大広間にて晚餐。演芸師、素謡弱法師、予シテ、ワキ 加藤高明君、其外囃子舞、仕舞等、芸妓鶴亀 衣裳附て。十時頃一同歛を尽して退散。予等又自動車にて帰。

十一月七日 壬寅 日曜 陰、正午より雨。

朝、予、辰子と品川宮原え茂子死去二付悔みに行。みな鎌倉に行て不在。来客、新田の使清水純寧、田口あやと其母。

受信 角田年弘より、かじや(鍛冶屋)蘭数株、深沢半蔵より林檎一箱。

十一月八日 癸卯 月曜 雨。

課業例の如し。来客、川村東陽、丹羽花子、木村妻。

十一月九日 甲辰 火曜 雨。

朝、研究生之稽古済て、午下、明日拵準備にいそかし。寄宿舎にてハ花造にて大くいそかし。夜更るまで。

十一月十日 乙巳 水曜 陰、后晴。

朝四時起。六時食堂に集る。始白き〔酒〕黒き〔酒〕の御酒にて杯廻る。御雑煮、向、こまめ、数の子、黒豆、梅干、大根人参の御なます、御つけ物にて一同御祝、正月の如し。御昼、御節、赤飯、白味噌汁、はんへい、かふら、鯛一尾。午下弐時、生徒全部集る。式場三時より、第一、君か代二唱、第二、校長勅語拝読、校長御即位に付ての御はなし、畢而御大典唱歌、畢と同時に寸毫のすきもなく三時三十分号報一声に天王〔皇〕陛下万歳三唱して祝意を表し畢。生徒一同菓〔子〕、日の出饅頭、まが〔勾〕玉菊の蒸菓子、箱入一箇ツ。四時より職員一同を作法室にて御祝酒を出す。鴨入り雑煮、御なます、こまめ、数の子、黒豆、梅干、鯛焼物、御すもしにて賑々敷、正月の如し。七時頃済。

十一月十一日 丙午 木曜 陰、夕雨。

課業例の如し。来客、穂積松子。浅野惣一郎、二男縁談の事にて来る。高木藤太郎、廿日宴会招待を頼みに来る。

発信 太田氏え書をよす。

十一月十二日 丁未 金曜

朝の研究生稽古する。伯爵堀田正恒君より左ノ御吹聴あり。

養祖父故従四位下堀田正睦え特旨ヲ以テ従三位追陞ノ旨御沙汰ヲ蒙リ候間、此段御吹聴申上候。 敬具。

十一月十三日 戊申 土曜

課業半日にして休業。予、雨宮と三越二行、紫宸殿、悠記〔紀〕、主基殿の摸形〔型〕を拝見す。夕景帰。婦人画報記者国分まささを。

十一月十四日 己酉 日曜 晴

早起。散歩して帰。来客、正子。予、李子と約の如く帝劇に行、見物して十一時帰。

十一月十五日 庚戌 月曜 晴 摘要 本日より朝九時授業之事。

朝、墓参して帰。課業例の如し。本日生徒一同、校衣始て着服す。夫ニ付職員生徒一同式場ニ付校長之服制ニ付生徒申聞ケあり。次ニ李子より懇々と申し聞せ、主事よりも一時間三十分迄。

来客、桜井照世、裏松千代子。

十一月十六日 辛亥 火曜 晴。

天晴朗。朝十時御召ニ応して東京府庁へ参集、御真影奉拝、当府献上品参観。正午十二時、諸員着席。次ニ上席者、賜饌拝戴、並ニ御礼執奏ノ詞ヲ述ブ。次ニ賜饌拝戴、次ニ上席者、天皇陛下万歳ヲ称フ、三声。各退散ス、一時三十分也。予ハ直ニ青山御所に参る。園祥子様ニ御目ニ懸り、皇后陛下御機嫌奉伺ス。をりく草一冊、汲泉二冊献上を願ふ。御当日、御饗饌、京都ニテ陛下ノ召上らるゝと同じく皇后陛下モ御饗饌召上らるゝを私え御下賜相成。白き〔酒〕黒き〔酒〕の御酒、瓶のまゝ御かわらけ二杯ニ戴き、其御するく御昆布と其外御饗饌を戴き、園様も今日ハよき折からにてよほと御縁の深き事と仰せられ候。四時過、退出ス。

十一月十七日 壬子 水曜 晴。

朝、散歩して帰。課業畢而、午早々川田行。夫より東伏見宮へ参り、先伊丹百重さまの御悔みを申て、百重さまの家へ行。京都より百重さまの妹伊丹某ニ久々にて御目にかゝり、先々此度の御死去より種々御物語して焼香す。然し主人たる人なくて異なもの也。夫より志賀氏を問ふ。鉄千代、鈴江、御子共たちと出懸の処にて直ニ帰。本日、中村元嘉氏より電話にて神代鎌〔謙〕〔介〕氏死去ニ付、郁之進夫婦今朝来り謙介氏へ行きたりと。

十一月十八日 癸丑 木曜 晴。

課業例の如し。来客、太田氏代理小原氏、芝明定院使高木氏。訃音、森千代子、産後急病にて死去。李子悔二行。

十一月十九日 甲寅 金曜 晴。

朝、研究生稽古する。来客、神代郁之進、鶴子と同道、久々にて面会。郁之進ハ元巢鴨泰之処へ行。李子案内にて、鶴子、寿子、帝劇に行。鶴子一泊ス。来客、秋月菊子の母。発信 穂積松子え書をよす。秋元すわ子え。

十一月二十日 乙卯 土曜 晴。

朝、課業例の如し。鶴子、午下遅くより元巢鴨二行。

十一月二十一日 丙辰 日曜 晴。

朝、墓参して帰。神代郁之進、鶴子、石川房子、子共と一泊。葉室伯の来客にて(以下記述ナシ)。

十一月二十二日 丁巳 月曜 晴。

朝、墓参して帰。課業例の如し。森俊成子より千代子御退(逮)一夜二付三時よりの招待二付、予、李子と参詣する。夕餐を饗せられ、次ニ御統(読)経ニ逢て帰。月鏡の如し。石川房子、子供仲子を(ママ)と本日帰浜す。

十一月二十三日 戊午 火曜 新嘗祭。晴。

朝、霜如雪。朝、研究生稽古する。夕餐後、予、李子と万里家二行、京都御大典の御咄し等伺ひ、京都市民の行儀のよき事に感佩する。月如鏡。神戸神代、此夜九時夜行にて帰りたるよし、廿四日朝聞く。来客、酒井氏画を願に来る。

十一月二十四日 己未 水曜 晴。

課業例の如し。返信、大宮、秋元、石井氏え。紀州九鬼村石淵民平え為替五円分、絹本と返却す。午正(ママ)早々、河田氏え行て帰。受信 相川より玉葱着。

(十一月二十五日～二十七日、記載ナシ)

十一月二十八日 癸亥 日曜 晴。 摘要 大願成就日。

朝、浅草観世音え参詣して、百日の祈願本日にて成就する其御礼申上候。本願寺に参詣して帰。予て黒田茂の宮、有間(馬)恭宮、同貞宮より陛下御還行(幸)奉迎を御一緒にと御頼みに相成候て、文部省え御場所等を頼み、午下一時より、予、李子、教職員等御道筋に参る。此時、学校其外団体十万人と云。しかし文部省の場所、てんとう(テント)ノ下にて実に結構々々。茂宮様のみ成らせられたり。とんと退屈もなく四時間の待つ、日西山に入て陛下御還行(幸)を拝したり。御代々の陛下もこの御威陵(稜威)の御高きにハ及はせられすと存し

上る。実に何共申し尽しかたく、只々森殿の神々しき御厚徳のほと仰き奉るの外なく候。賢所に御つゝきあらせられて、六馬鳳輦にてラツパノ声静に、二重橋御還行（幸）あらせられたる。

十一月二十九日 甲子 月曜 晴。

朝九時よりお茶水女子師範学校四十年記念式に参列す。伏見宮経子妃殿下御台臨あらせられる。

十一月三十日 乙丑 火曜 晴。

朝、研究生稽古する。午下閑院宮ニ参り、妃殿下に拝謁す。京都御大典御盛儀の御模様共同ひ申上たり。明日より修学旅行の御暇申上て退出す。種々準備いそかし。

発信 返し、石井初、三浦香峰、横山正一、書画骨董誌社。

(十二月)

十二月一日 丙寅 水曜 晴。

朝四時起、準備。五時半出門。六時廿分東京駅発車。此時迄城氏不来、一同心配。三木由子も其内、城氏来、安心す。木村、初出来事に窓からす（ガラス）ニテ頭をうち怪我す。からす（ガラス）窓をふちわたりたり。きつい脳力哉。品川にて旭日をみる。所々秋色風光絶佳、本年ハ嵐などなくて未だ紅葉もよし。千（茅）ヶ崎にて雪の富峰をみる。静岡にて昼鯛飯をとふ（食べ）る、十二時半。天気好、如春。

十二月二日 丁卯 木曜 晴。

朝七時、一同準備揃にて、門前より八時電車乗て、先外宮より参拝す。行幸後故、すへて四方山々公園に至る迄、神々森殿、大神のまし所と拝観す。夫より内宮拝観。二見浦に参りて、一時十分宇佐館に帰。昼食して二時廿分山田駅に着、二時五十分発車。伊せ（勢）朝報記者長島湖吉ニ逢ふ。夜十一時、京七条に着。此時、勧修寺伯迎來られ、弘、鶴子、幸子、鶴巻、渡辺も來られる。緑館に着。この旅館不都合千万、畳数三十二に六十人の客、とても寝る事ならず。談判致したれと実に無積にん（責任）甚し。この隣家に翁湯と云湯や有て一同入浴して

先々温まり、食事の仕度もなく、迎ひに来られたる博士の夫人たち、みるに見かねて近辺のすしや急ぎ拵させ、すし沢山下されて空腹をしのきたり。男先生たち、予、李子、鶴子と外の旅館に行。是又化物屋敷の如くにて、寒くてとても寝られず。夜の明るを待て、

古郷の錦にせよと紅葉のもすそにかたにちりかゝるなり

十二月三日 戊辰 金曜 晴。

朝六時迄一同拵して、勸修寺伯迎ひに来られて旧御所に参る。第一番に拝観仰付れ、紫宸殿の御装飾、高御位(座)、御てう(帳)台、階下御飾具、燻、万歳幡、森殿いふへからず。大裳(嘗)宮に参る。悠基(紀)、主紀(基)殿の有様、神代の天孫降臨の当時偲ひ参らせて、殊に有かたし。誠御先導志の御かけにて結構に拝し畢ぬ。生徒等一同西山見物。こゝにて別れ、予ハ加茂万里小路幸子さまを訪ひ、幸子さま大く御悦にて種々御物語などとして錦織隆子さまを訪ふ。久々の御対面、何から何やら御咄しつゝけにて、夫より白川姉小路良子さまを問ふ。桃山参拝御不在にて、豊に逢て、みなく大くひつくり。其上御昼飯をいたゞき御建築をくまなく拝見して、実に好気色、吉田山より東山を庭にして、みるまゝに雲のかゝりたり晴たり面白く画の如し。其内良子さま御帰りにて久々の御咄しにて御暇申上て、南禅寺高倉さまを伺ひ、是また久々にて御こた(炬燵)にあたりなからの種々の御咄しにて、もはや午下四時頃にて早々御暇申上て、東洞院瓦(河原)町長谷川旅館二着。

十二月四日 己巳 土曜 晴。

早起。一同拵えして長谷川旅館を立出す。桃山御陵参拝す。予ハ二度目ながら、実に是迄二ハよくこそ拵き御道路、長き間両側の杉植立られ、神々シン(森)殿たる、可驚限り也。御陵のひかへ処にて、予をよくしりたる人にて大ゐに悦んで世話もしてくれ、参拝の案内者もつけられて、御簾やの御前三所のまん中にて拝す。先帝陛下に謁したる心地して只感泣不止。やゝ立(経)て昭憲皇太后の御陵に参拝す。先帝より少し御ひくき所にて、風景は殊更御よろしく、梅林もあり、西宇治川に臨みて、勸修寺伯の地名其外説明あり。夫より清水寺に行、新高雄の紅葉の下の茶亭にて昼食を★(言上契(喫)す。紅葉も残る秋の色を呈して風色殊更なり。予ハ車にて五条坂を(降)りて一同を待事凡二時間、伊藤徳大急きにて予をさかし来るに逢て涙を流して悦ひたり。夫より七条停車所に至る。李子、荷物拵にて宿に残り、夫より姉小路を問て汽車の今出る一セツナ(刹那)にて漸間に合、一同無事乗車する。

十二月五日 庚午 日曜 晴。

汽車中横浜わたりにて日の出実に見事也。八時半東京駅着。大勢迎ひ来り、通学生と無事退散す。一人の病気もなく五日間天晴朗にて、修学旅行之光栄限りなし。

十二月六日 辛未 月曜 晴。

五年生のみ休業。来客、新田細君。

十二月七日 壬申 火曜 晴。

朝より研究生稽古する。来客、中村幸子。

十二月八日 癸酉 水曜 晴。

朝来客、神戸早川京子、久々にて対面す。課業例の如し。正午早々、河田氏え行て帰。佐藤静子夫人来られて明日の参列、其外教育者叙勲招待会ニ付、相談せらる。明日ハ同行之事。此二日御降誕王男子御命名式、崇仁親王澄宮と申し奉る。

敦五品以崇仁、恢（ヒロク）六典以教（敷）訓

澄水静而清也、秋水共澄鮮、明月澄清景

受信 神代鶴子より書至。

十二月九日 甲戌 木曜 晴。 摘要 天皇陛下臨幸ヲ仰き奉り、東京市奉祝会ヲ上野公園ニ御挙行。東京市長奥田義人。午前九時迄来会之事。

朝八時、自動車にて佐藤静子、棚橋絢子迎に来る。予と同行にて上野に行。御道筋の人々可驚有様也。黒門より来賓之馬車、自動車之通行道有て容易に休憩処ニ着。元博覧会跡大広間三千人と云。市会議長、同議員等式場に入ル。九時御出輦、徐行にて十時半入御。我等御側近く真正面にて拝謁。陛下御震（三宸）儀殊に御麗はしく拝され、両脇に皇族竹田宮、国（久邇）宮、北白川、梨元（本）宮、両楼下に大臣たちをはしめきら（綺羅）星の如く立並ひて、式場ハ紫宸殿の如く御丁（帳）台の前に御着在らせられ、会員一同え拝謁を給はり、市長賀辞を拝読ス。一同万歳三唱。入御、衆員一同最敬礼にて君か代奏樂にて。畢、食堂ニ付、裝飾も奇麗にて、三千人の男子の内、女子予等の三人也。食事済て帰。帰途、大通筋の形（景）況を見

る。出たも出たり、通白木屋辺迄人山の如し。酒井勇子、其姉と暇乞にきたる。

十二月十日 乙亥 金曜 晴。

朝より研究生稽古する。

十二月十一日 丙子 土曜 晴。 摘要 本日午後二時、上野精養軒にて叙勲の人々祝賀会開設。

本日、予、李子と精養軒に集る。もはや余興、吉備楽あり。高砂舞、少女の舞、振よく出来たり。次、貞水講談、又吉備楽、備後二郎桜木に題する処。畢而開会辞、中川建次郎氏講演。夫より続々演舌もありて食堂二入。極々質素なる茶菓にて皆心地よく会したり。一同広庭にて撮影、退散。五時帰。来客、味の素あるし鈴木氏。

十二月十二日 丁丑 日曜 晴。

発信 房州跡見え小包出す。

十二月十三日 戊寅 月曜 晴。 摘要 本日午後一時、帝国ホテルに於て祝賀会。

東洋婦人会、婦人教育会よりの招待にて増田浪江夫婦、自働車にて予を迎へて同車にてホテルに行。会長毛利安子様、鍋島栄子様にて新旧叙勲者及会員七十余名。午餐中、伊集院氏の開会之辞、叙勲者代理山服(脇)房子挨拶あり。毛利五郎男の演舌ありて食事、畢、庭にて一同撮影、済て退散。四時帰。

十二月十四日 己卯 火曜 晴。

朝より研究生の稽古する。午下、別に四年生の稽古する。

十二月十五日 庚辰 水曜 晴。

課業例の如し。午下、河田氏へ行。帰途、角田氏え歳末に行て帰。朝、墓参する。

十二月十六日 辛巳 木曜 晴。

課業例の如し。

十二月十七日 壬午 金曜 晴。

朝より研究生納稽古にて賑々しく済。午下、五年生の勅題の豎詠草稽古する。

十二月十八日 癸未 土曜

朝の課業例の如し。

十二月十九日 甲申 日曜 晴。

朝より来客つゞきにて多忙を究(極)める。午下早々、青山御所へ参る。陛下御降誕の恐悦申上、汲泉雜誌献上する。園典侍様に御目にかゝりて種々御咄し申上る。陛下、親王様、御ふた方様とも大く御機嫌よく御するくくと御肥たち被遊、御乳も陛下のをよく召上られ、御強そうなる御愛らしき宮様にて、とんと御むつかりあらせられず、御きけんよく成らせられると仰せられ候。四時退出する。

皇后様より御召一反、御袖入拝領仰せ付られ候。

十二月二十日 乙酉 月曜 晴。十五夜の月鏡の如し。一天の雲なし。

課業例の如し。所々え歳暮配りに遣す。来客とにて忙殺繁昌。

十二月二十一日 丙戌 火曜 晴。

朝、火曜研究生納稽古する。午下、教授する。

発信 秋元すわ子え返上。

十二月二十二日 丁亥 水曜 晴。

課業例の如し。御勅題ニ付豎詠草かゝせる。本年ハ加藤氏出勤なく哥の添削もおそくて大困りくも也。

十二月二十三日 戊子 木曜 晴。夜雨。

御勅題和歌にて朝九時より午下四時迄かゝる。

十二月二十四日 己丑 金曜 晴。

本日迄、御勅題寄国祝之和歌生徒にかゝせ、朝十時教授納。予、及主事、李子之種々申達ありて無事退散す。

十二月二十五日 庚寅 土曜 晴。

御大典ニ付、陛下え献上之生徒一同画と和歌短冊出来にて、予ハ奉祝之箱之蓋に水墨菊花金泥入揮毫ス。

十二月二十六日 辛卯 日曜 晴。

朝九時半より、予、李子と谷中天王寺にて万里小路博房卿、陛下より生前之功劳を思召れ祭詞（祀）料御下賜ニ付祭典に参拝ス。畢而所々の御墓参りをして芝万里家ニ行、午餐之饗応に諸親戚一同相会して、四時帰。天氣晴朗如春。

（十二月二十七日〜三十一日、記載ナシ）

金銭物品貸借簿

十二月廿八日 壹円拾一銭 安ハヤ かんさしリボン、外二一